

### (3) FD 集会（平成 29 年 3 月 29 日）

#### 「本学におけるアクティブ・ラーニングのいま、そしてこれから」

##### 【企画の趣旨】

第 3 期中期目標・中期計画においてアクティブ・ラーニング（以下、AL）を取り入れた授業を学部課程、大学院課程とともに全開講授業の 6 割以上で導入することを目標としている。本年度採択の「主体的・協働的な学び」を実践できる教員の養成－AL を導入した新たな学習指導方法の開発－のプロジェクトは、上記の数値目標達成のために AL の研究・推進活動をしている。プロジェクトの実施主体である教職キャリアセンターは、教員の AL に対する認識と現状を明らかにするために、AL に関するアンケート調査を昨年 7 月に実施した。その分析の結果、本学が目指す AL について共有する必要であると結論付けた。そこで、AL アンケート調査の集計結果、本学での AL 実践例、本学が目指す AL について、本学教員間で情報共有するために全学 FD 集会を開催する。

##### 【実施概要】

開催日：2017 年 3 月 29 日（水）

開催時刻：13:30 ～ 15:35

場 所：愛知教育大学 本部棟 3 階 第 1 会議室

参加対象：大学教職員及び学生

集会タイトル：「本学におけるアクティブ・ラーニングの  
いま、そしてこれから」

教職キャリアセンター主催 全学FD集会  
本学におけるアクティブ・ラーニングの  
いま、そしてこれから

- ① アクティブ・ラーニングアンケート結果の報告
- ② 本学におけるアクティブ・ラーニング授業の実践例1
- ③ 本学におけるアクティブ・ラーニング授業の実践例2
- ④ 本学が目指すアクティブ・ラーニングについて

第3期中期目標・中期計画においてアクティブ・ラーニング（以下、AL）を取り入れた授業を学部課程、大学院課程とともに全開講授業の6割以上で導入することを目標としている。  
プロジェクトの実施主体である教職キャリアセンターは、教員のALに対する認識と現状を明らかにするために、ALに関するアンケート調査を昨年7月に実施した。その分析の結果、本学が目指すALについて共有する必要であると結論付けた。そこで、ALアンケート調査の集計結果、本学でのAL実践例、本学が目指すALについて、本学教員間で情報共有するために全学FD集会を開催する。

【日 時】>>> 2017年 3月29日 水  
13:30～15:35 受付:13:10～

【場 所】>>> 本学 本部棟3階 第1会議室

【参加対象】>>> 本学教職員 及び 学生

※ 申込不要  
入場無料

- ※ 第一節 「アクティブ・ラーニングアンケート結果の報告」  
司会：伊東 正人（経済学部長）
- ※ 第二節 「本学におけるアクティブ・ラーニング授業の実践例1」  
司会：大鹿 聖弘（経済学部長）
- ※ 第三節 「本学におけるアクティブ・ラーニング授業の実践例2」  
司会：新山王 敦典（経済学部長）
- ※ 第四節 「本学が目指すアクティブ・ラーニングについて」  
司会：野田 敬敏（教職キャリアセンター長）

本学 教職キャリアセンター 高度教員養成支援課 総務係 〒466-8657

##### 【プログラム】

時刻	時間	項目（タイトル）	担当者
13:10～		受付開始	
			司会：幅先生
13:30～13:35	5分	開会挨拶	後藤学長
13:35～13:55	20分	「アクティブ・ラーニングアンケート結果の報告」	伊東先生
13:55～14:00	5分	質疑応答	
14:00～14:30	30分	「本学におけるアクティブ・ラーニング授業の実践例1」	大鹿先生
14:30～14:35	5分	質疑応答	
14:35～15:05	30分	「本学におけるアクティブ・ラーニング授業の実践例2」	新山王先生
15:05～15:10	5分	質疑応答	
15:10～15:30	20分	「本学が目指すアクティブ・ラーニングについて」 (質疑応答含む)	野田先生
15:30～15:35	5分	閉会挨拶	菅沼理事

## 【開催報告】

### 2017年3月29日「本学におけるアクティブ・ラーニングのいま、そしてこれから」を開催

3月29日（水）本部棟第一会議室において、教職キャリアセンター主催のFD集会を開催し、教職員・本学学生・一般から82人が参加しました。本学教員の4人が、本学におけるアクティブ・ラーニング（以下、AL）の現状、実践授業例、そして目指すべき方針について報告しました。

はじめに、伊東正人准教授（理科教育講座）が、昨年7月に実施したALに関するアンケート結果を報告しました。アンケートの対象者は、本学で授業を担当する教員と非常勤講師を合わせた420人で、265人（回収率63%）から回答がありました。アンケートの結果、回答者のうち90%がAL授業を実施しており、AL授業の開講授業数に対する割合は、学部では65%、大学院では77%であることが分かりました。10%がAL授業を実施していませんでしたが、その中には、「今後、AL授業を実施してみたい」、「迷っている」など、AL



集会の様子

に対して肯定的な意見がみられました。アンケート結果を受け、本学でAL授業を実施するためには、ハード面（教室整備、ICT機器導入）やソフト面（授業形態の方法や教材開発）の支援が必要であることが報告されました。また、他大学のALに対する取り組み例も報告されました。

次に、本学で実践されているAL授業例の報告がありました。大鹿聖公教授（理科教育講座）は、教科教育科目「理科教育CII」での実践例を報告しました。大鹿教授は、学生の自己主張や自己表現力を高めるために協働学習を授業に取り入れており、協働学習活動の方法やその発展のさせ方、評価方法、その効果と課題などについて報告しました。

引き続き、新山王政和教授（音楽教育講座）は音楽的思考を基盤として、生活の中のイメージやアイデアを音楽表現に結びつける能動的な学習活動を導入した授業を報告しました。また、一般学生や音楽選修・専攻学生を対象にした授業で実践された、グループ活動によるリズム創作が報告されました。さらに、音楽選修・専攻4年生を対象にした授業での、博物館を取材したプロモーションビデオを製作する活動が報告され、学生が実際に製作したビデオが上映されました。両教員のALに対する考えに対して、活発な質疑応答が行われました。



最後に、野田敦敬副学長（教職キャリアセンター長）から、教員養成大学ならではの4つの視点（主体的学びの視点、対話的な学びの視点、深い学びの視点、教員養成としての視点）を含めた、本学が目指すALの方針について報告がありました。質疑応答では、4つの視点に対する活発な意見交換が行われ、これらを集約し、今後、本学が目指すAL像を発表することが述べられました。

#### **報告をする野田教職キャリアセンター長**

本学は第3期中期計画において、ALを取り入れた授業を学部・大学院ともに全開講授業の6割以上で導入することを掲げています。本FD集会で報告された本学におけるAL授業の現状と授業実践例、および4つの視点から眺めた本学独自のAL案は、教員の今後の改善につながると考えられます。本FD集会は、各教員の授業がどのような視点に立ったものになっているかを見つめ直すよい機会となりました。

（「主体的・協働的な学び」を実践できる教員の養成プロジェクト代表 伊東正人）

（高度教員養成支援課 高度教員養成総務係）

## **F D 集会の様子**

### ○司会（幅）：

それでは、時間になりましたので、始めさせていただきます。

本日は、年度末のお忙しい中、当FD集会にお集まりいただきましてありがとうございます。本日、司会をさせていただきます理科教育講座の幅と申します。よろしくお祈いします。

それでは、まず初めに開会のご挨拶を菅沼理事よりお願いいたします。

### ○菅沼理事：

皆さん、こんにちは。非常にたくさんの方にお集まりいただきまして本当にありがとうございます。このプロジェクトは、本学は第3期に3つの大きな戦略を掲げていまして、そのうちの1つが、「実践力を身につけ、現代的課題に対応した高度な教員の養成」という戦略のもと、皆さんのお手元にプリントが配布されていますように、「主体的・協働的な学び」を実践できる教員の養成、アクティブ・ラーニングを導入した新たな学習指導法の開発という第3中期のプロジェクトを今年度、昨年4月にスタートしました。メンバーは、そこにプリントを用意いただいていますので、ごらんいただきますと、プロジェクトのリーダーを理科教育講座の伊東先生にお願いしまして、幅先生、齋藤先生、梅田先生、砂川先生にプロジェクトのメンバーとして入っていただいております。それから、NTTラーニングコモンズの久保さんにクロスアポイントという形で半分大学に来ていただいて、半分会社ということで、このプロジェクトに協力していただいております。

このプロジェクトは、最終的にアクティブ・ラーニングが実践できる教員養成プログラムをつくりましょう、それから、アクティブ・ラーニングの授業ができる現職教員の研修プログラムをつくりましょう、それから、アクティブ・ラーニングの授業が実践できる大学教員の養成プログラム、さらに、アクティブ・ラーニング授業の指導方法、教材の開発、アクティブ・ラーニング授業の推進拡充ということを目指して現在進めていただいております。今年度既に2回FDを開催させていただいて、それから、アンケートもやっていただきました。

1年間たったところで、次年度に向けて、改めて大学の中でそもそもアクティブ・ラーニングは何なのかと。1年たったところで、スタートに立ち返って、きょうは共通理解をしていただくためのFDの講演会を開催させていただくことになりました。実践例として、理科教育講座の大鹿先生、音楽教育講座の新山王先生に具体的なお話をいただいて、それを参考にして、ぜひ活発な討論をしていただき、本学の中でアクティブ・ラーニングの共通理解をしていただいて、次年度に向けて実践を進めていく機会になればなと考えております。どうぞ活発なご議論をよろしくお祈いいたします。

以上です。

### ○司会（幅）：

ありがとうございます。

それでは、プログラムに従って進めさせていただきますが、最初に、皆さんに1点だけご容赦いただきたいことがあります。本FD集会は、終了後、報告書としてまとめる予定ですが、その際、本FDで出た質疑応答内容を記載させていただきたいと思っておりますので、よろしくお祈いします。ただし、ご発言いただいた方のお名前が出ることはありませんので、どうぞ遠慮なく能動的な意見をたくさんいただければと思っておりますので、よろしくお祈いします。

それでは、最初に、「アクティブ・ラーニングアンケート結果の報告」ということで、伊東先生、お祈いします。



## 第一部「アクティブ・ラーニングアンケート結果の報告」

講師：伊東正人（理科教育講座）

先ほど、このプロジェクトについての詳細な内容をお話しいただきましたが、私、理科教育講座の伊東と申します。なぜ私が選ばれたかといいますと、ちょっと経緯を説明しますと、2年ほど前に、菅沼理事に呼び出されまして、この書類を書いてみないかということで書きましたところ、採択されてしまいましたので、その責任もあって、このプロジェクトのリーダーをさせていただいています。余り仕事はしていませんけれども、これからやっていきたいと思います。

先ほど説明がありましたけれども、「主体的・協働的な学び」を実践できる教員の養成ということで、ご存じのように、もう新学習指導要領にはアクティブ・ラーニングという言葉が入っている。学校の現場に行くと、アクティブ・ラーニングの授業ができるような、そういう教員の卵を育てるという一貫したプログラムをつくりたいというのがこのプロジェクトの主な目的です。一応実施主体は教職キャリアセンターになっています。我々メンバーが教職キャリアセンターに提言していく形で現在行っています。

先ほどもお話がありましたように、このアンケートをする上で、少しやらなきゃいけないことがありまして、それが4本の柱になっています。先ほども説明がありましたように、まず本学の学生に対しては、AL授業が実践できるような教員を育てたい。そのためには、我々現場の教員がアクティブ・ラーニングとはこういう授業なんだよと見せてあげる必要があるだろうということで、お互いに相補的な関係でつながっています。我々教員は、このようなFDや授業公開を通して、それぞれALに関する情報を共有していこうと。それを受講した学生たちは、学校現場に行くと授業ができるような、そういう体制をつくりたいと思っています。もう1つは、実際に現職の教員の方がALをやりたいと思っても、なかなかできないという方に対して、免許更新や研修会を開いて、こういうものですよというようなことができる体制をつくりたい。もう1つは、ICT機器等を利用した、もしくは授業方法、そういったALをするための教材開発をしていきたい。こういうプロジェクトをしていく間で、やはり現在の愛知教育大学でアクティブ・ラーニングがどのくらい行われているのかということで、昨年7月に皆様方にアンケートを配らせていただきました。

これは、先ほど紹介がありましたメンバーになります。

先ほど説明がありました第3期中期目標において、このプロジェクトを進める上で、まず数値目標を立てようということで、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業を学部と大学院ともに全開講授業の6割以上でやろうという数値目標を掲げたわけでございます。

今回、昨年7月に行われたアンケート調査、多くの方々に協力いただきましたが、まずその目的は、本学教員のALに対する認識と現状の把握、それから、どのくらい授業が行われているかということです。実際にもしやっていない方がいるとすれば、ALを導入する上でどんな問題があるかということで、実際調査結果を得て、本プロジェクトの遂行に向けた材料にしたいということです。

調査期間は、昨年7月14日から31日まで行いました。対象は、本学で授業担当する大学教員と非常勤講師の方々であります。昨年行われていまして、その前の年の授業、1年間が対象なので、2015年に開講した授業に対してALの調査を行いました。調査方法は、紙をお配りして、それを回収するという形です。

昨年、本学教員の方々にはアンケートを見られたと思いますが、多分忘れていていると思いますので、ちょっと書いておきました。アンケート調査、問1、ちょっとばかにした質問かもしれませんが、「アクティブ・ラーニングという「ことば」を知っていますか？」ということで、4段階で調査させていただきました。その後、文科省が提示するアクティブ・ラーニングをもとに、「実際に担当している科目に、ALの要素を含む授業はありますか？」ということで、「ある」「ない」でそれぞれ設問を分けました。

お配りした資料を見ていただきたいのですが、「ある」と答えた方に対しては、実際に何コマ中、何コマやっていますかというふうに数値を書いてもらっています。学部と大学院で分けて記入してもらいました。

問4は「16回の授業うち、何回ALをやっていますか？」という大ざっぱな分類をしました。問5は「実際にどんな授業をやっていますか？」と聞いています。次に、「ある」と答えた方に対しては、問6は「授業の中でALの要素を導入するとき、工夫した事は何ですか？」と聞いています。問7は「今後どういうふうにやっていきますか？」ということです。

一方、ALの要素を含んだ授業はないと答えた方に対しては、「何で導入しないんですか？」と、その理由を聞いています。「今後どうしますか？」が問4になります。次が、「ない」と答えているんですが、「もしやるとしたらどんなことをやってみたいですか？」と、問7では「もしやってみるとしたらどんなことが課題になりそうですか？」と聞いています。最後、自由記述になっています。

今回お配りしたレジュメは、また幾つかアップデートしてまして、幾つか変更している部分や追加している部分があるので、ご容赦ください。

このアンケートの結果をご報告させていただきます。

本学の教員237名、非常勤183名の420名に対して紙を配布いたしました。返ってきた枚数が265枚で、回収率63%ということで、結構いい数字ではないかなと思っています。

この回収率のもと、まず問1「アクティブ・ラーニングという「ことば」を知っていますか？」ですが、①かなり知っている、②ある程度知っている、③最近、耳にするが詳細は知らないを足し合わせると、9割以上の方が知っている。全然知らないという方もいますけれども、ほとんど知っている。

問2「担当している科目に、ALの要素を含む授業はありますか？」に対しては、8割以上の方が「ある」、1割が「ない」という結果になりました。もちろん「ある」と答えたからアンケートを出しているという可能性もあるんですけども、ちょっと未回収の部分については全くわかりませんが、一応こういう結果になりました。

まずは、「ある」と答えた方に対しての結果になります。「ある」と答えた方に対しては、これちょっとわかりにくいんですけども、要は自己申告のコマ数なんですけど、1480コマ中966コマの導入をしていますよという意味です。分母は全部足しただけです。分子は、ALの授業をやっていますよというコマ数を足し算したものです。簡単に言うと、アクティブ・ラーニングの授業の実施率みたいなものだと思います。大学院に関しては、319コマ中244コマやっていますよということになっています。ともに大体6割以上、実際に行われているという、これは教員の自己申告によるものです。

今度は、16回のうち何回ALをやっていますかということで、「1、2回」が6%、「3～8回」が46.8%、「9回以上」が46%、ほとんどの人が1回やっている分には半数回以上ALの授業を取り入れたものを行っているという結果が出ました。

次に、複数回答なんですけど、「実際どんな授業形態をやっていますか」ということで、学生を参加させたり、共同授業、問題解決型授業、野外実習など、ほぼ満遍なくやられている方が多いです。

さらに、複数回答ですが、「どんな工夫をしていますか」という点では、授業の方法や教材の工夫をしていますよという回答が多かったです。

「AL授業を今後どうしていきますか」という問いに対しては、「増やしていく」が25%、「現状のまま」が61%、1人ですが、「減らしていく」という方もいらっしゃいます。ほぼ現状維持のままいきたいという人が多かったです。

一方、やっていないという人に対してのアンケートですが、「何で取り入れないの」という理由に関しては、「科目内容に依存する」という方が一番多かった。それから、「授業方法がわからない」という方もいらっしゃいました。

「今後やりませんか」と聞いてみると、意外とそうではなくて、「ALの要素を取り入れるか迷っている」という方が半分、「導入してみたい」「予定である」という方もいらっしゃるのですが、「ない」と答えていても、やっぱりいずれやってみたいという方がほとんどを占め、2割弱ぐらいの人が「取り入れる必要はない」という意見でした。

あとは「導入してみたい授業形態」、これは複数回答ですが、満遍なく、もしやるのであればいろいろやってみたい。それから、「もし導入するのであれば、どんなことが課題になりそうですか」では、やっぱり授業方法や教材のことについて課題になるのではないかという回答がありました。

以上を踏まえて、自由記述も後で紹介しますが、これが大ざっぱなものです。

まとめますと、ALの要素を含む授業を実施している教員、先ほどの回収した265名のうち少なくとも233名は自己申告でやっていますと言っていますので、ほぼ88%と。未回収なのでわかりませんが、分母を全配布枚数の420でやると、大体5割以上がALの要素を何らかの形でやっている授業がありますよと答えています。この辺の数字は先ほどお見せしたとおりです。こうやってやるとほぼ中期計画を達成してしまったように見えるんですが、まだこれはこれからいろいろ内容も含めて、人も含めて考えていかなければならないと思っています。

これは学系別で考えてみました。教育科学系、自然科学系、人文社会学系、創造科学系、もちろんアンケートに答えているということは、やっているよということではあるんですけども、教育科学系は95%、自然科学系は82%、人文社会学系は88%、創造科学系は91%と、ほぼ9割の方々は何らかの形でやっている。導入している授業の割合は、自然科学系は、後で言いますが、多分学問の性質上、座学が中心になっている点もありますので、ちょっとこの中では低目に出ています。

あとはまとめになります。先ほどの数値を繰り返すだけですが、やはりALを含まない授業は、今回回収した中で1割いましたけれども、そんなにネガティブではなくて、やっぱりやってみたいという人が非常に多かったという印象があります。理由の中に、科目に対する依存度が非常に多いのと、授業準備が大変、それから、学生のためにならないよという方もいますが、基本的にはやってみたいなという方が多いということです。

あと分析というか、大した分析ではないですが、グループ内で少し、私の私見もちょっと入っていますが、アンケートを提出した教員の約9割が「実施している」と答えている。やはり出していない人が一体どういう状況なのかということが知りたいなということがあります。先ほどもありましたように、自然科学系のほうは、学問の性質上、座学中心になりがちなので、なかなかALを実施するのが難しい。それが数値にも出ています。それから、ALを導入していない教員でも、やってみたいという教員が半数以上いるという点では、このプロジェクトではハード・ソフトの面でALの授業をできるような支援体制ができればいいかなと思っています。その辺もわかりました。どうしてもやりたくないという人は非常に少なかった。

それから、ALの要素を含むというふうに大ざっぱに実はアンケートに投げていまして、余り具体的なことを書いてなかったのが、なるべくアンケートに答えている教員の方々の考えで書いてもらったので、もう少し具体的に書いたほうがよかったなと感じました。

それから、ちょっと意味が伝わらないかもしれませんが、2番目は、本プロジェクトが一体ちゃんと達成に向かっているかというのはどうやって評価すべきかというのは、なかなかこれは難しい。実質を伴ったものになっているのかと。単なる数字合わせで6割を達成するようなことではだめなので、その辺は学生からの目線で見た評価をしなければならないなど。それは、教員が「これはAL授業だよ」と言っても、受けている学生が全然違うじゃんと思ったら意味がないわけで、学生側からのALの授業評価も必要ではないか。今後は学生と教員の双方向の授業評価が必要ではないかと思えます。

そういう点で、このアンケートの結果を受けまして、本プロジェクトを達成するために、愛知教育大学独自の目指すべきALを提案すべきではないかという結論に至りまして、最後の講演で、野田先生にその提案をしていただくことになりました。

この後は、レジュメには書いていないのですが、アンケートの自由記述には多くの意見をいただきました。賛成意見 24 件、反対意見 22 件、こんな形で出ています。時間が 5 分ぐらいしかないので、ざっと読み上げますと、例えば、賛成する意見に関しては、「海外の大学では AL が多く取り入れられています。本学でも積極的に取り入れていくべきと考えます」とか、創造科学系の方は「AL を取り入れることによって、学生相互の意識が高まり、両者のコミュニケーションがとれているので、全授業で取り入れてよい」という積極的な意見があります。反対の意見もそれぐらいありまして、「学生主体の参加型授業を今まで進めてきたものであって、これから AL として特に進めていこうとすることには賛成できない」「教える内容を減らさない限り、AL の導入は難しい」「学生の興味・関心が低かったり、能力が低いと効果がない」とばっさり切り捨てる方もいらっしゃいます。最後のところは、「AL という言葉ばかりが世の中で出回り、実態や内容、科目の特性によっては特別含む必要のない科目まで無理に AL が求められている気がします」と。それぞれ多分学問の性質上や各個人によって AL に対する捉え方が非常に多様ななということがわかりました。多分人それぞれの AL に対する意識があると思うので、今ここでどれが正しいとか、間違っているということはいえないと思います。

それから、幾つか要望も自由記述には書いてありまして、「教室におけるインターネット関係の充実を希望いたします。無線 LAN の関係を早期設備、設備の充実が必要と考えます」という点で、やはり本学においては環境が余り整っていない。そういう点で、ICT 機器の利用とか、無線 LAN のテーブルの使い方とか、その辺が充実していないという点は要望がありました。

その他意見で、これは別にどうこうではなくて、幾つか私見が書かれていました。「そもそもアクティブ・ラーニングという語を用いずとも、学生たちは熱心に講義を聞いている実態がある。授業は講義者と受講者との相互行為であるため、AL と表記せずとも、意識せず、AL の要素は自然と毎回の講義の要素として含まれている」と。ふだんから私はやっていますよという意見も、もちろんあると思います。最後のほうは、「文科省による定義を読むと、当該科目に関する知識のみならず、倫理的、社会的……、経験を含めた汎用的能力の育成を図るとあり、具体的な実施方法については戸惑いがあるものの、教育者に対して科目に対するより深い知識を要求している点では、案外オーソドックスな教育方法であるように感じました」と。いろいろ多様な AL に対する考え方があると思います。この辺の自由記述に関しては、4 月末に年次報告書を出します。全意見を、個人名は特定できないような形で公開していきたいなと思っています。

早速、このプロジェクトで幾つか提案したものの一つとして、皆さんにシラバスを書いていただいていると思います。これは各回に AL を入れてくださいというふうにお願いしました。例えば、第 3 回に AL を入れてくださいというふうに言いました。レジュメに書いてあるのは 3 月 27 日時点だったんですが、今朝やってみましたら、シラバスの AL と入れると、2016 年度は 17 件で、今年入れると 709 件。AL という記述が 40 倍ぐらいになっていますので、お忘れの方は、まだ多分編集できると思いますので、対応する授業回数については AL と入れてください。

もうそろそろ終わりです。これもレジュメに載せていないのですが、他大学の AL に対する取り組みを一つだけ紹介したいと思っています。それは山口大学です。山口大学は、AL ポイントという認定制度を導入しまして、これ教員用と書いてありますが、もちろん学生用もあります。これは、各授業に AL ポイントというものを設定して、シラバスに記載されています。

ここに山口大学の AL の定義があります。ちょっと見にくいので、読み上げます。山口大学では、このように定義しています。

AL とは、アクティブ・ラーニングの略称です。本学における AL とは、「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、認知的、論理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図るため、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法、括弧内は飛ばしますが、を指し、その対象として、授業科目による正課教育だけでなく、授業外学修である正課外教育を含む。なお、授業科目においては少なくとも 1 コマ以上行うものとする。」としています。

前半は文科省のアクティブ・ラーニングの定義そのものでして、後半が山口大学独自のALになっています。こういうのを大学として認定して、シラバスを見ると、こんなふうになっていまして、各授業にいろんな授業形態で、一つの授業の回数にどのくらい行われていますかというのを、「多」「中」「少」というので数値化して、その授業がどのくらいALの授業形態で行われていますかという数値化を行っています。足し算したものと授業回数を割り算して、ALポイントというものをしています。シラバスでは、このように各授業に何ポイントありますよということが書かれていて、このポイントは、単位数と間違いないようお願いしたと書いてありますけれども、こういうふうに学生にとっては見やすい形でシラバスが記載されている。

このように、いろんな大学でもう既にアクティブ・ラーニングに対する取り組み方が全学的に組織的に行われているということが現状になりつつあります。別に愛教大がこうしろというわけではなくて、他大学の例としてご紹介いたしました。

時間になりましたけれども、このプロジェクトは皆様のご理解とご協力が必要になります。今回、2名の方々が授業の紹介をしていただきますので、今後とも突然メンバーのほうから、次やってくださいと多分振りがあるとありますが、嫌がらずに、ぜひご協力のほどよろしく願いいたします。

私のほうからは以上です。ありがとうございました。

《質疑応答》

個人情報を含むため削除

個人情報を含むため削除

個人情報を含むため削除

○司会（幅）：

それでは時間になりましたので、終わりにしたいと思います。

次は、アクティブ・ラーニング授業の実践例ということで、理科教育講座の大鹿先生、お願いします。

## 第二部「本学におけるアクティブ・ラーニング授業の実践例 1」

講師：大鹿聖公（理科教育講座）

理科教育講座の大鹿です。今回、伊東先生のほうから、実践例を発表してくださいということで、させていただくことになりました。よろしくお願いします。

授業に入る前に、なぜこういう授業をやり始めたかという前置きがあるので、そこから始めたいと思います。研究の関係で海外へ行くことが多くて、海外で日本の授業と違うことをいろいろ見ていまして、特にアメリカなんですけれども、いろんな探求的なプログラムをやっていたり、いろんな教授方法をやっている。授業も実際見ていると、かなり方針が違って、あと子供が中心にやっている活動、プレゼンテーションをしたり、ディベートしたりというのをすごくたくさん見てきました。

これは向こうで見てきたものですが、60分ぐらいの授業で、いきなりテーマがきて、30分後にはプレゼンしているみたいな授業も頻繁にあって、上に、〇〇の日と書いてありますが、結構何とかの日のプレゼンをしろみたいなものがあって、私が行ったときはたまたま、「黒人の日」というのがあって、理科だったので黒人の科学者の資料が配られて、その資料を見ながら、ディベートをやるみたいなことをやっていました。とにかくしゃべるんです。授業中なんですけど、合っている間違っているは別として、しゃべるので、やっぱり日本でも、学生が寝ているとか受け身じゃなくて、コミュニケーションを図りたいなというのがあって、いろいろちょっと考えました。

その中で、アメリカにBSCSというカリキュラム研究をやっているところがあるんですが、そこが教科書をつくっていまして、中学校用の教科書なんですけど、その中に、5Eという一種の教授方法があるんですが、5段階でカリキュラムを進めていくというのですが、それと共同学習、いわゆるグループ学習を取り入れるというのを教科書の中に盛り込んでいます。1冊、こういうのをやるというのがあって、すごくおもしろかったので、何とかこれを、うちの学部生に教えたり、やらせたいなということで、考えました。

これちょっとまた外れるんですけど、私個人的に授業をやるときにちょっとやっていることがあって、よく「百聞は一見にしかず」と言うんですが、見ただけだと結構スルーしちゃうんです。やっぱりやったら忘れないというのがあって、とにかく体験させないといけないなと。さっきの教授方法の話もそうなんですけど、授業で話して、学生にこうだよと見せるのはいいんですが、見たらスルーしちゃうので、やっぱりやらせないといけない。体験させないといけないなというふうに常々考えていて、じゃどうするかと思ったら、やっぱり自分の講義の中で体験させないといけないなということで、それがそもそもやり始めたきっかけです。だから、アクティブ・ラーニングを教えるということではなくて、共同学習をやりたいなということです。

僕の授業でやっているCIIで、プレゼンテーションをやろうと、共同学習を入れようということで書いていますし、実際にそういうことをやっていますよというのを入れています。

これはポイント等々を書いていますけど、これはどうでもいいので、スルーさせてもらいます。

実際15回の授業なんですけど、ちょっとわかりづらいので、シラバス15回で、赤がついているところが、きょう紹介する協働学習の活動が4回入っています。複数回入れているのは、ちょっと意味があるので、また後で話をしますが、こんな感じになります。

私の協働学習の授業を大きく分けて中身は3つ、教材の話と、環境教育の話と、諸外国のカリキュラムの話ということで、3つ大きな話をしているんですけど、それぞれ話が終わった後に協働学習を入れるという形でやっています。一番最初は、とにかく協働学習というのを体験してもらおうということで、一番最初はいきなりやるんですけど、2回目以降、慣れることとそれぞれの授業でまとめたことを使っていくということで、こういう形で4回入れています。

実際、どういうものなのかということですが、さっき紹介した教科書の方法をそのまま単にばくっています。やり方としては、4名1グループで、役割分担があります。役割はまた後で話をしますが、4人が全部違う役割を持



っています。時間制限があつて、90分なんですけれども、90分の中で75分間使っています。最後1分間のプレゼンテーションを各グループがするという形になっていて、資料は特段ありません。授業が始まったときに渡されたものからスタートなので、ゼロからやっています。下のほうに、今こういうことをやりたいなということで、要は、さっき言った協働学習を体験してもらふこと、あと時間管理です。あと個人と集団の責任能力、プレゼンをするのでプレゼン能力、あと単元ごとにやるので、そこで学んだことを応用してもらふということでやっています。

これやり始めて、僕もちょっと古いのを見てみたら、2010年にこちらに来て、2010年のやつを見たらやっていた。2011年からやっているの、6年ぐらい続けています。現在、実際どうなのかというと、学生が50〜60名いて、4名1グループなので、大体12から15グループをやっています。なので、毎回毎回十何グループが発表をするというような授業です。

これは大まかに75分の割り振りなんですけど、最初に4人の役割を決めて、個人で質問用紙に記入と書いてありますが、これは後でまた紹介します。その結果をもとに、話をしながら、プレゼンのテーマを与えて、30分でプレゼン用紙をつくって、大体1時間後にはプレゼンを始める。さっき言ったように15班ありますので、1分間のプレゼンでも、結局15分かかって、入れかわり立ちかわりもあるので、大体20分から25分要るんですけど、それでも大体75分から80分で終わるようにはなっています。

済みません、皆さん方の資料にこれを入れるのを忘れていまして、いかんいかんと思っていたんですが、授業が始まったときに、「指令書」と書いていますが、A4 1枚の紙を配ります。これにきょうの授業でやる内容を全て書いています。赤枠で囲って、文字が小さくてわからないですが、最初に1番目のブロックでこれをしなさいよ、ここまで何分間でやりなさいよということが入っています。次に、これをやりなさいよ、またここまで何分間でやるといって、3つ目が終わったときには、プレゼンの準備が終わって、最後のところでプレゼンして、評価をするという形になっています。時間は誰がはかるのかというのは、役割のところではちゃんと時間をはかる人がいるので、その人が気にしながら、あと何分しかないからどうせいこうせいということをやったりとか、というので必ずやっています。理科なのでプレゼンでなくてもいいんじゃないかと。本当は私は実験・観察・応用をやりたいんですが、いかんせん教育大学の授業で実験・観察はなかなかこの人数はできない。結構、実験・観察すると授業が延びるので、時間管理も含めて、こういう提案をということで時間の話を取り入れることにしています。

ここはちょっと細かい話で、どんな形かという話ですが、役割を4つこういうふうにつくっています。これは教科書のやつをばくっているの、別にこういう役割じゃなきゃいけないわけじゃないんですが、単純にマネージャー、コミュニケーター、トラッカー、チームメンバーということで、時間をはかる人、チームリーダーになる人、コミュニケーターというのは、ほかの班と意見交流したりする人、マネージャーというのは物を取りに行く人とか、そういうふうな4人違う役割を持たせて、それぞれ何かの仕事が必ずあるというふうにして、先ほど言ったように4回あるので、4回必ずこの役割を変えろということにして、なので1つの講義の中でどれかは必ずやる。結構休む学生がいるので、その辺うまく満遍なく回らないんですが、大体必ずどの役もこなすようにしています。

役割が決まったら、A4・1枚でアンケート用紙みたいなものを配っています。要は、グループの単位で質問をつくっています。左のほうに例が書いてありますが、一番最初はいきなりなので、「理科が小学生に嫌われる理由は何だと思いますか?」とか、「高校理科は必修がいいですか、選択がいいですか?」とか、そういうふうなちょっと授業に関係するような内容を書いています。例えば「教科書は紙がいいか、デジタル教科書がいいか?」みたいな、そういう質問も入れたりして、とにかく何かは書けるような形で書いていって、下のほうはだんだん講義内容に絡んだ話を入れていったりするんですけど、とにかく何か書くというふうにして、右側のようなアンケート用紙に10分ぐらいで書かせます。時間が余れば、班の中で、「おまえ何を書いたの?」というような話をさせながら、そこでディスカッションをさせています。ここで大体10分ぐらい。その後、私のほうから、どここのグループ

はこのプレゼンをしなさいということでお題を配ります。単純な話、さっきのアンケートが14本あったら、14個、その問題についての分析をしなさいとか、分析して考えを発表しなさいみたいな形のテーマを与えて、アンケート用紙が受講人数分あるので、受講人数分のアンケート結果をそれぞれ各班が収集して行って、それをもとにしてプレゼンの準備をしていく。なので、50人受講者がいれば、50人分のデータが自分の班に集まってきて、それをもとにプレゼンをつくっていくということをやっています。

結構、やっていくとどうなるかという、白紙のアンケートとかがあったりします。あと、よくわからない答えを書いている学生がいます。そうすると、このデータを見て、「何だこれ」と言う学生がいます。よくそうなっているんです。これどうしたらいいですかと。書いたやつがどこかにいるから探せばいいじゃないのと言ったら、さっき言ったコミュニケーターで動くやつがいるので、誰か書いた人いませんかと聞いて聞いたり、理由が書いてない人がいれば、この理由は何ですかと聞きに行ったりすることで、資料をつくりながら、各自で追加の情報収集をしたりしています。ぼくの授業は、これをやっている限りスマホは完全にフリーです。「先生、これわからないんですけど」と言ったら、「おまえスマホがあるだろ」と言えば勝手に調べる。スマホで何でもかんでも情報を引き出してくれるので、発表に必要なものは全部そこで彼らがやっています。さらには、場合によっては追加でアンケートを自分たちでつくって、また個別に聞いたりしながら、そこで学生同士が話し合ったりということをやっています。

プレゼンの方法なんですけど、結構先生方がやられているプレゼンってパワーポイントをしっかりつくらせるというタイプだと思うんですけども、それをやっていたら時間がかかってしょうがないので、単純な話、A3用紙とマーカーを配らせておいて、それでとにかく30分で仕上げようと言っています。もうひたすら書く。最初のうちは結構鉛筆で下書きしながら丁寧に書いていましたが、だんだん時間がないというふうになってくるので、とにかく行き当たりばったりでもいいので書くようになっていきます。さっき言った、時間が来たら、大体60分ぐらいたつと発表の時間になるので、そこで1分間の発表をやっています。

右は発表している風景ですが、あんな感じで、A3を手書きで、手に持ってやっています。今だったらパワーポイントのほうがきれいなんですけど、手書きなので結構いろいろ言ってます。本人たちはいっぱい満足げに書いているんですけど、後ろで見ていると全然見えないとかいろいろあって、最初は結構細かい字で情報をたくさん入れる班が多かったんですけど、だんだん慣れてくると、後ろの人が文字が読めないととなると、絵にしたりとか、文字は少な目とか、そんなことでいろいろ学びができるようになっていきます。

これを十何班発表します。必ずプレゼンの評価をさせています。自分以外の班でどこがよかったかというのを必ず毎回書かせています。何がよかったかというのも書かせています。別にそれがいいとか悪いとかいう話でなくて書かせています。それを受けて、また次のときに自分たちが何を学ぶかということなので、いろいろ次の回に活かしていくことができます。この1分間のプレゼンというのは、私は授業でしか使っていないんですけど、学生にやらせるときには、最終的には教員採用試験で自己アピールするときに1分で自己アピールしろと、1分間という時間を覚えるのは大事だと言ってだましてやっているんですけども、そういうところで時間の大事さを、どのぐらいしゃべったら1分間なのか、30秒なのかというのをこういうところでトレーニングさせるという意味もあってやっています。

最初は形だけだったんですけど、さっきも言ったようにもう5、6年続けているので、私自身ちょっとマンネリ化している部分があって、少しずつやり方を変えながら、いろんなネタを入れています。ワールド・カフェってご存じの方もいると思いますが、テーブルを変えて意見交流するというのもよくやっています。2番目、Play Decideというのがあります。これは実はヨーロッパで開発されている意思決定のプログラムなんですけど、環境教育をやるときに生態がないので、そのときにネタが少ないので、そのネタをもらってきて入れたりとかやっています。あともう1個、テーマ設定のところ、講義内容に関するレポートをつくっています。協働学習をやる週の前に必ずレポートを書かせて、そのレポートを協働学習のネタに使うということもやっています。そうすると、誰々のレポー

トはこのプレゼンに使えるのだという、レポートをとりについて読んでいます。読んでいるんですけども、レポートが何を写してあるのかわからないという、書いた本人に文句を言いに行ったりして、「これどういうことなの？」と聞いたりするので、そういう意味では、人のレポートを見るということもさせたりして、レポートの書き方を学ばずじやなくて、人のレポートを見て学ぶということもいろいろさせたりしています。

今回、発表しろと言われたときに、今回は評価をとっていなかったの、何年か前にこれをやった学生にアンケートをとったものがちょうどあったので持ってきました。これ5段階評価で、いい悪いでとったものの平均をとったんですが、グループの役割とか、積極的な発言はできましたかとか、資料はつくれましたかとか、こういうことをアンケート用紙に5段階でとりました。1、2、3、4というのは1回目、2回目、3回目、4回目ということです。見てもらうと、微増ですけども、やっぱりやればやるほど少しずつ上がっていているなというのわかりました。

講義の中にこういうことを入れたんだけど、講義の内容に反映とか、うまく活用できましたかという話で、これも聞いたら、意外といい感じで、よかったよという話は学生のほうから上がっています。

これは、自由記述で書いてあったものです。協働学習をやってみて、どんなところがどうだったというのを自由記述したものです。1回目、2回目、3回目、4回目でどんな感じの内容のコメントが多かったかというのをやったんですが、一番最初は、とにかくみんなでやらなきゃいけないのが難しかったとか、時間が間に合わなかったとかということをしごく多くコメントしているんですが、回を追うに従って、そういうのはなくなってきて、プレゼンの資料とか方法の検討とか、話し合いを深めたりとか、質のほうにだんだん移行しているというのがわかってきて、やり方は学んでくるので、だんだん学生自身もそういうところに意識が行くのかなという話でした。今また大分変わってきたので、また違う感想になっていますけれども、傾向としては大体同じです。

これをずっとやってきて、何がいいかという、学生が主体的に講義参加しています。僕は何でこれを毎年やっているかという話なんです、学生にも言っているんですが、この授業を15回のうち4回入れているんですが、この授業をやっている間、ぶっちゃけた話、僕は何もしません。学生がやっているのを見て、ふーんと言っているだけです。学生は必死こいてやっています。寝ることもなく、やっています。2回目、3回目、4回目となってくると、本当に慣れてくるので、何も言わなくても勝手にやっています。要は、教師にとってはしごく楽です。その割に学生は、きょうは何とかの話ができてすごい授業だったと、僕は何もしてないけどと思いつつ、学生はしごく喜んでいるというのがあります。いろいろやっていくので、資料をつくったりとか、プレゼンをしたりとか、発言するという能力も上がっていきますし、講義の内容についても彼らなりにまとめていってくれるので、しごくよくなっているなと思っています。今後も続けていこうと思っています。ただ、やっぱり限界があって、さっきも言ったように、教科専攻でたくさん的人数がいるので、本当は実験観察をやりたいんですけど、そういうところできないこと。今言ったように、どうしてもプレゼン方式しか今まだ僕もやれていないので、そのほかの方法にというのが今まだできていない。その辺をどうベクトルとして新しい方向に持っていくかというのが私自身の課題かなと思っています。

最後は、僕自身の個人的な意見です。アクティブ・ラーニング、そもそも私もいろんな本を読み始めたときに、最初に見たのが、高校の物理の先生がやっているアクティブ・ラーニングで、最初に15分講義して、それに関する小テストをやって、最後にテストをやるというやり方が入っていたんです。私は理科の中でも生物なんです、生物にはこれはできないなというのがあり、生物ではこれはできないので、どうしたらいいかなといったときに、やっぱり物理には物理のやり方、さっき伊東先生もおっしゃられていましたが、いろんな教科でそれぞれのスタイルがあると思うので、自分がやりやすいものを見つけることが大事かなと思っています。学生をアクティブにするために、それなりのインプットが必要と書いていますが、確かに私自身、授業の90分を動かすために、どういうネタにしようかなというの毎回は考えている部分はあるので、その辺は考えなきゃいけないのと、さっきも言われていたと思うんですが、15こまあったら、15こま全部アクティブにする必要はなくて、やっぱり普通の講義は講

義でちゃんとインプットしてやらないことにはいけないので、講義しながら、要所要所に入れればいいのかなど。3つ目、さっきも言ったんですが、一番大事なのはこれです。教員が苦勞するというのは絶対長続きしないので、私も結局5、6年続いている理由は、単純な話、楽ができていますので、今週は協働学習だからちょっと楽ができると思いつつやれている。そういう意味では、学生もそうですが、お互いに教員も楽ができるというか、長続きできる方法をやるのがいい。そのかわり、授業をしない分、若干のサポートはしていかなきゃいけないと思っています。最後、これもそうなんですが、やっぱり唆さないで学生は動かないので、これやると君たちのこれが上がるんだよとかいう、あめになる部分というのは非常に大事なかなというふうに思っています。

ほかの先生方のお役に立てるかどうかはよくわかりませんが、私自身、こういう活動で授業をやっています。私自身、アクティブ・ラーニングということで学生には言っていないですが、最近の学生からのアンケートでは、先生のアクティブ・ラーニングが一番よかったと。僕はやっていませんけれども、学生はそういうふうな理解をしているのかなと感じています。

つたない発表でしたが、以上で終わります。ありがとうございました。

《質疑応答》

○司会（幅）：

どうもありがとうございました。それでは、質問等があればお願いします。

○質問者5：

どうもありがとうございました。小学校の教員をしております。

先生が協働学習による効果・課題というところで、講義内容での限界と課題を話されたんですけども、諸外国では、こういう実験観察活動が困難というところをどういうふうに解消しているかという、いい実践例を見られたなら、それを教えていただきたいということと、やっぱりスキルとか知識として学生に残らなければいけない。そういつたときに、実践的なもので、しかもそれを残すための工夫というか、そういうのになるとどうなのかなということが小学校でも今課題なんです。要するに、活動はしているけれども、先生、計算できませんというふうになってしまうと、これはやっぱり次の授業とか、あるいは積み重ねの授業なんか非常に困るわけです。ですから、そのところをどうやってこれからは知恵を出してやっていくのかなということを考えておるんです。

以上です。

○大鹿：

ありがとうございます。

海外の中で、実験観察に関しては、どちらかという時間的なものは余りにしていないと思います。私こちらに来てから2年ほど、学校の先生を連れてアメリカの理科教育の現場を見に行くというので、学校の先生と行っているんですけども、とにかく日本の先生が向こうの授業を見て思うのは、ぶっちゃけた話、ルーズ、えーっという感じが多いです。どちらかという、日本では決まりをまずきちんと教えた上でやるんですけども、向こうは、とにかく「やれ」、やった中から自分のことを言えというので、だから時間よりもとにかくひたすらやらせて、そこから子供自身に何かを見つけさせるみたいな感じのことをやっているというのが現状です。

おもしろかったのが、日本だと例えば物をはかるときに、必ず何グラムというはかり方をすると思うんです。結構細かい話ですが、私は高校の授業を見に行ったときは、浸透圧の実験をしているにもかかわらず、食塩水と砂糖水と水というのをつくったんですが、食塩水と砂糖水をどうつくったかという、スプーン1杯、スプーン2杯という感覚で濃度差をやっていました。要は、何%ということが大事なので、濃度の違いが見たいだけだから、そんな細かいパーセントにはこだわらない。というような感じで、日本の先生も「何だこれ」ということを言っていた。そういう意味で、さっき言った質と方針とかやり方が全然感じが違うというのをすごく感じている。日本だと、ど

うしても授業時間内という感覚があるんですが、向こうは、どちらかというところ、そういう意味ではルーズな部分が多いかなと。

(音楽が流れる) 授業中もこんな感じで、結構アットホームな感じでやっています。

環境教育については、さっき言ったように、とにかくひたすらやらせるというのがメインです。

あと、スキルの向上はどうかというところなんですけれども、私自身もまだ評価をうまくはかれていないというのが現状です。なのでどうしても学生自身の主観的な感想になってしまうのは間違いないんですけれども、でも1分間プレゼンテーションに関して言えば、最初の1回目というのは必ず極端に短いか極端に長いかです。私は結構、1回目はわざと厳しくしています。1分たったら無理やり切ります。なので、最初の1回目というのは言いたいことの半分も言えないで、ああ一つと終わる班が多いんですけれども、2回目、3回目以降になると、何か知らないですけど、下書きを書き出す人がいて、リハまでし出して、その30分の間に、これをつくっている人間としゃべる人間が役割分担しながら、リハを2回、3回やって、大体50秒ぐらいで終わるといっているところを見ると、そういうスキルが上がっているかなというのがありますし、文字の大きさであるとかということにも表現方法は必ず変わってきているんじゃないかなと。ただそれを数値的にどういう評価をするかというのがまだできていないので、それは私もちょっと考えなきゃいけないかなと思っています。済みません、ちょっと歯切れが悪いです。

○司会(幅) :

ほかにあればお願いします。

○質問者6 :

非常におもしろいといえますか、視点が非常に豊かだなどとお聞きしていました。ちょっと概念についてお聞きしたいんですが、協働学習という言葉が鍵になっていますけれども、この場合、協働学習ということで、どういった内容を協働学習と呼ばれているのか、あと、同じような協働学習でも、コミューナル(communal)な共同を使う場合もありますし、あるいはコーポラティブ(cooperative)のほうの協働を使う場合もある。今のご発表はコラボレイティブ(collaborative)な協働なのかなと聞いていたんですが、そこら辺は使い分けされているのかどうかお聞きしたいです。

○大鹿 :

ありがとうございます。

ここでやっている協働学習というのは、さっき紹介したBSCSというテキストがベースにしているのは、ジョンソン兄弟が開発しているコラボレイティブ・ラーニングの部分を入れています。そもそも私自身、協働学習をやったときには、結構小中学校で班別学習をやっていて、実験観察もやっているんですけれども、普通小中学校での班別学習というのは、必ずリーダーがいて、リーダーが全部仕切って、発表も全部リーダーがやってというところに主が行ってしまっているんで、やはり班の全員が責任を持って何らかの役割を果たす、仕事をこなす、リーダーもほかのメンバーに対して働きかけるということを私自身ちょっとやらせたいなという部分があった。結局、大学でもそうなんですけれども、グループを組んで、レポートを書かせても、1人だけが書いて、ほかの班はよろしくとなっちゃうのも避けたいなという部分もあって、とにかく4人全員が何らかの形でかかわり合えるのを私自身の思いにしている部分があります。よかったですか。

○質問者6 :

そうしますと、ジョンソンという方の枠組みがあるということですね。

もう1つ関連して、グループワークというかなり一般化した言い方もありますけれども、それよりは、今お話があったような、役割分担の工夫であるとか、そういったことを組み込んだ学習方法であると考えたらよろしいですか。

○大鹿：

実は1回目の協働学習のときには、いきなり指令書を配るのでなくて、一応ジョンソンが提唱している協働学習についての要素と効果についての資料は配って、こういう目的とこういう意味があるよというのは紹介しています。それを口で説明するよりも、実際に体験するというところでやってもらうというのがあるので、その辺は、個人の成果、集団の成果、振り返り効果みたいなものをちゃんと実はこうこうだよ、この活動はこうだよ、この活動はこうだよ、というのは一応還元できるようにはしています。

○司会（幅）：

もう1つぐらい、いかがですか。

○質問者7：

先ほどアメリカの理科的な学習の話を興味深く聞かせていただいたんですけども、私の受けとめとしては、子供たちが自然との関係の体験を自分のものにしていくという、そこの部分が一番重視をされているのかなというふうに受けとめたんです。その関連で、アクティブ・ラーニングということの本質は何なのかなということをおこぼれと疑問を持ってきているところなんです。

先ほどの文科省の定義とかその辺とのかかわりで、アクティブ・ラーニングということにあえて対話的ということを入れたところに、何か意図があるんだろうなと思っているんですけども、私個人的には、特に理科とか自然とのかかわりでは、自然をざっくり直感的に体験するところにこそ本当意味のアクティブな学びがあるんじゃないかと思っています。

それから、私は技術教育ですけども、技術はまさにアクティブな学びをしていて、それは理科にも直結していくアクティブ・ラーニングそのものではないかと常日ごろから思っていて、評価の体系そのものを改めるべきではないかと思っているところなんです。そこまで話を広げると、きょうの話から外れてしまうとは思んですけども、今いろいろ意見を言われましたのであえて言うんですけども、アクティブ・ラーニングというのはそもそも何なのか、一体本当に有効な学び方は何なのかということをおこぼれを真剣に考えないといけないうんと思っと思っています。特に大学では、そこのところが最も問われるところで、文科省的な定義を一律に当てはめるところに、大学の本来の学びの方法はないのではないかとこのように思ったりしているところなんです。という意見です。

○大鹿：

ありがとうございます。多分、その質問は、後で新山王先生が答えていただけると思っていますので、頼りにしています。

私、最後にも書いてあると思いますが、学校の先生は結局、自分が学んだものしか教えられないというのがあるというのを私自身も思っていて、結局、学ぶことがあれば、子供には授業ができる。さっきのこれをやる理由も、体験すれば多分やれる。話に聞いていても、多分やれないかなということ、やっぱりやらせるというのがあります。

さっき対話的という話があったんですが、今の学生はおしゃべりはしていますけれども、自分の考えを述べ合ったりしない。私は広島へ行ったり北海道へ行ったり、あちこち行っていて、いろんな県の人のお話を聞くと、結構考え方が違うんです。ここは愛知県なので愛知県の人が多いので、愛知県はみんな同じかということ、実は尾張と名古屋と三河で結構考え方も思っていることもかなり違うんですけども、そういうのってふだんの会話の中ではしゃべらない。でもこういうところで何らかのきっかけがあつてしゃべると、「えっ、おまえそんなこと考えていたの」というような話が出てくる。ふだんとは違う対話の部分でいろいろ人の考え方の違いを知ったり、本当の自分はこうだったのかと考えるきっかけにもなるんじゃないかなと思っっているんで、この対話というのは、ふだんのしゃべりの話ではなくて、自分の考えを改めて表現するという意味では、こういう場は大事なかなと思っっています。余り先生の答えにはなっていないんですけども、ちょっと思っっています。

○司会（幅）：

時間になりましたので、終わらせていただきます。

大鹿先生、ありがとうございました。

それでは、「本学におけるアクティブ・ラーニング授業の実践例2」、新山王先生、お願いいたします。

### 第三部「本学におけるアクティブ・ラーニング授業の実践例2」

講師：新山王政和（音楽教育講座）

音楽教育講座の新山王です。よろしくお願いいたします。大鹿先生のようにALに対して熱意を持ってパワーポイントをつくっておられませんので、私にとって目に優しい大きい文字で、できるだけピンポイントに話していきたいと思います。

今からいろいろ文章等お話しするんですけども、太田先生にあのようにキラーパスを渡されると、何もしゃべれなくなってしまって、恐縮しています。私個人的にちょっとお話に入る前に、どこに行ってもお話ししているのは、「アクティブ・ラーニングというやり方はありません」という話をしています。どこに行っても、「アクティブ・ラーニングってどうやったらいいんですか」、「アクティブ・ラーニングって何ですか」と必ず聞かれます。私が必ず答えているのは、「ザ・アクティブ・ラーニングというのはない」と言っています。三河のほうの附属の先生方にもお話をしています。これぞアクティブ・ラーニングというのはないと私は信じております。ですから、大学の私の授業の中でも、先ほど大学院生の方からコメントをいただきましたけれども、大鹿先生と同じように、私自身がアクティブ・ラーニングをやっているつもりは実はありません。じゃなぜ今ここで話しているかといったら、ある日突然メール1本で決まったんです。私、別のプロジェクトに入っているんですけども、そこから指令のようなものが飛んできて、できる云々の選択肢はなかったですね、「お願いします」でしたので。今後、来年以降、プロジェクトに参加するときには、後の後まで考えて参加しないとイケないのかなと思っております。

アクティブ・ラーニングという言葉は使いませんでしたがけれども、大鹿先生と同じように、私も大学の中での授業のやり方というのは物すごく悩んでまいりました。音楽というのは技能系教科ですから、ある人に言わせれば、放っておいたらそれがアクティブ・ラーニングなんですね。先ほど、居眠りすると。居眠りどころか、しゃべりまくって、部屋から出ていけないだけうちの大学の学生は偉いなど思っているんですけども、その元気いっぱい、叱ると今度は静まり返っちゃうんです。その元気いっぱいのを何とかしないとイケないというので、技能系教科というのは、やっていたらアクティブ・ラーニングという誤解があるんですけども、それを何とかしたいというのがありました。同じように音楽大学で教鞭をとっている仲間の中で頻繁にその話し合いをしています。実技をやらせればアクティブ・ラーニング、そうじゃないだろうというのがあります。

2つ目は、これ教科の特性にかかわってくるんですけども、指導者、この場合は私ですね、私のコピーをつくりたくないというのがありました。音楽という教科はどうしても、うちの学生は今やりの言葉が上手ですので、付度ですね、私の顔色を見ながら上手に演奏をつくっていくんです。ただ、何年か前に気づいたんですけども、クローンだったらいいんですけども、コピーって大体どんなすばらしいコピー機でも8割ぐらいですよ。この学生が子供たちに同じことをやったら、8割、8割で64%しか伝わらない。だからコピーをつくってはいけません。もう1つは、自分の価値観を押しつけてはいけないというのがありました。どうしてもまじめな学生になればなるほど、私を喜ばせようとしてくれるんです。先ほどの学生がいるので言いにくいですけども、一生懸命私の期待に応えてくれようとする学生に対しては、バケツの水をひっかけるようなことをいたします。「何をやっているの」とか言って。「で、あなたは何をしたいの」と言うんです。このように考えるようになったきっかけは、10年ぐらい前になるんですけども、私自身がコーチングというのを学び始めたときに、かなり参考になるものがあったもんですから、コーチングをいろいろ研修等を受ける中で学んできました。それがアクティブ・ラーニングにもしかしたらつながるのかもしれないですけども、その辺はよくわかりません。このような前提があって、授業の中でいろいろ、はっきり言って学びました。

きょう録音があるということで非常に困っているんです。先ほどの院生もいて、今真つすぐ目が合って困っているんです。アクティブ・ラーニングは大鹿先生は楽と言われましたけれども、疲れますね。いらいらして精神衛生上非常によくない。ぼんぼんぼんと指示を出していけばいいし、さっき先生がおっしゃったように、知識とスキル



の定着ということを考えたら、非常に悩ましい部分があります。なんだけれども、結果を見ると、学生さんのほうを見ていると効果がすごくあるんですね。私が一生懸命話して、一生懸命聞いたふりをしてきている学生たちよりは、定着度が高いし理解も深い。

ただ、私アンケートを出したかどうかわからないんですけども、話があっちへ行ったりこっちへ行ったりしてごめんなさい。あの「やりたくありません」の1人が私じゃないかと思ってどきどきしているんです。なかなか難しいです。決められた回数の中で、自分が持っていきたいところまで、持っていくというのはおかしいですが、伝えられるかどうかと考えると難しいです。いろいろあります。

今から文科省が出している文章なども示しながらお話ししていきますけれども、大鹿先生とは真逆で、私はアクティブ・ラーニング推進派ではありませんので、そこのところだけ最初と言っておいて、それなりに苦しみながらやっているんだということをご理解いただけたらうれしいです。

今、1枚目のスクリーンをずっと出していましたから、お読みいただけたと思います。思考力、判断力、表現力とか、主体的、対話的、深い学びとか、これ突然出てきたんじゃないんです。これ学校教育法、昭和22年でしたか、学校教育法の条文を私引っ張ってきています。もうそのときに既にあつたんです。この条文をどういうふうに生かしていくかということで、その時その時の時代時代に応じて工夫がされたんだと思います。そして今、この条文の中でも特に「思考力、判断力、表現力その他の能力」というところで、それを使う力だとか学びに向かう力が入っているようなんですけども、それから、「主体的」というのも入ってきました。突然出てきたんじゃないんだということ、今までのずっと続けられてきた教育活動の営みの延長線上にあるんだということがわかると思います。

一応文科省で言っているアクティブ・ラーニングって何なんだろうということを考えないといけないので、調べました。初等中等教育における教育課程の基準等の在り方、これ文科省のホームページを見ていけば、この文章が出てくるんですけども、その中の①に、判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べることに課題がある。その後、いろいろ、今はやりの言葉が入っています。文科省が想定しているのがこれなんだろうと。

さらに、アクティブ・ラーニング、配布していただいた資料の12ページを見ていただきたいんですが、先のほうになって申しわけないです。12ページの左の下から、アクティブ・ラーニングの整理ということで、「教育課程企画特別部会論点整理H27.8.26」、この中から抜いてきたものがあります。そこに文章そのものを載せておりますので、またお時間があるときにお読みいただきたいです。要点は、いろんなものがあるんだと。さまざまなものがあるんだというふうになります。特定のやり方、スタイルというものが無いんだということがここに述べてございます。ということは、今ここで大学の内部でアクティブ・ラーニングの概念規定は何ぞやという話し合いそのものが不成立といえますか、先生方ご自身、私も含めて、自分自身で学生がどうやったら主体的に学んでくれるかというのを考えるのがアクティブ・ラーニングだなというふうに言えると思います。

さらに、この背景。「OECDにおけるキー・コンピテンシーについて」、これも文科省の資料で、配布資料の中に入れております。これは戻っていただいて、1ページ目の右のほうに、1.3.2「OECDのキー・コンピテンシー」の措定というのがあるんですが、次のページに向かってつらつらと書いてございます。これもまたお時間があるときに見ていただいたら、こんなことを文科省は言っているんだなというのがわかると思います。その中で②多様な集団における人間関係形成能力というところに私は特に着目をいたしました。先ほどの大鹿先生と同じだなというふうに思っていました。つぶやいているけど会話が成立していないということです。これを何とかしたい。ここに注目しました。

これをもう少し具体的に書いたものが、裏側になりますが、2ページ目の左の1.3.4のところ整理しておきました。「教育課程の編成に関する基礎的研究報告書」の中に具体的にこういうふうにいきましょうというのがあります。ちょっと読み上げます。有意義な文脈で学ぶ。子供たちあるいは学生が、めいめいに自分の意見を無秩序に言うんじゃなくて、一つの文脈の中で考えているものを言ったりする。それから、必ず自分の考えを持っている。

思いつきで何かを対処療法的に言うのではなく、必ず自分の考えを持って何かを言う。対話によって考えを深められる。この後、考えるためには材料が必要。それから、いろいろ書いてあります。このようなものを見ながら、自分自身の大学の中での音楽の授業というのはどうしたらいいのかなというのを考えてまいりました。

これは私が考えた「音楽科が寄与できる子供の成長」。二百数十人教員がいらっしやる中で、音楽の教員は今5人しかおりませんので、多くの先生が音楽ってこんなことを教えているんだと思ってくださったらうれしいです。歌が歌えたり、ピアノが弾けるだけじゃなくて、その中でいろんなことを学生たちにできるようにさせたいと日々悩んでおります。①②③④、こういうものを学生に身につけさせたいなというふうに考えております。パワーポイントのほうの配布資料にもありますので、またお時間があるときにごらんいただけたらうれしいです。

「自己理解の力」と「他者理解の力」が、コミュニケーションを確立する力へとつながる。「計画立案力」、これは練習の見通しや段取りですね。それから、「課題解決力」が自己実現の力へとつながる。要するに、自分自身で見通しを立てて練習をして、一つの演奏に仕上げていって、ステージにどう持っていくかというところ、このプロセスの中にこそ学びがあるというふうに考えております。これもパワポの資料、配布資料がありますので、またごらんください。

実際に学生に、あなたたちが身につけないといけない力はこの5点ですとっております。①テクニカル・スキル、②コグニティブ・スキル、③イノベーション、④インター・パーソナル・スキル、⑤コミュニケーション&コラボレーション。横文字にしたほうが、学生は格好いいと思って本気で聞いてくれます。要するに、括弧の中に書いてあるような、今始まったことじゃない、今までの教育活動の延長線上のようなものをもう一回きちんと考えましようということで、学生には話をしています。

あと文章が続きますので、読み上げることはいたしません。パワーポイントの配布資料、それから抜き刷りのほうにもございますので、興味をお持ちになってくださったときに、そのときに読んでいただけたらと思います。

要するに、活動あって学びなしということが久しく音楽科の場合特に言われてまいりました。3つ前の教科調査官は、はいずり回るだけの学習という非常に厳しいご意見を出されました。子供の中で、あるいは学生の中で、どうしたら学び、思考が深まっていくのかなということを考えました。それを私なりに整理したものが、このページ（8ページ）と次のページ（9ページ）になります。パワーポイントのほうにもありますので、興味をお持ちになったときにごらんいただけたらと思います。

ところで、音楽科において、思考というのは何なのとよく問われます。音楽って演奏するだけで、音楽を聞いているだけだから、思考だとか考えることはないんじゃないかと言われるんですけども、音楽科における思考というのは、この4つに分けられるとされています。これは私が言ったんじゃないです。こうやって私も言えるような立派な人になれたらいいんですけども、これは違います。①内的思考からのアプローチ、②「つくる」活動からのアプローチ、③認知論からのアプローチ、④教科としての学力論からのアプローチ、この4つのアプローチがあるというふうに言われております。

その中から、「つくる」活動からのアプローチというものを取り上げて実践をしております。音楽的思考というのは、分析的思考と批判的思考と創造的思考が合わさったものである、こういうふうに考えております。音楽的思考を基盤として、生活の中で育ててきたイメージやアイデアを音や音楽の構成要素——構成要素というのはピッチとか音色とか強弱とか、音楽を形づくるもの、その要素です——を使って音楽表現に結びつけるという学習活動、これが「つくる」活動からのアプローチとされています。

実際どうしているか。これは、一般の学生を対象にした教科教育、M1Aと言われている授業です。大鹿先生と違うのは、毎回の授業の中で、前半の約30分、長くても40分は私が講義形式で音楽の話をしていきます。学習指導要領の話であったり、歌を歌ったり、リコーダーを吹いたり、この時間は私が主役と言っています。それに続く60分ぐらいのところは学生の活動になっていきます。授業の後半がつくる活動。大体15回の中の授業で15回全部

使いませんので、10回から12回ぐらいの中で、①②③④⑤⑥⑦という活動をしています。例えば一番上の手拍子を共有する活動、何なのそれと思われるかもしれませんが、これ非常に難しい。

一番前の列、誰も目が合いません。野田先生、目が合いました。私が今から手拍子を2回鳴らしますので、その先に3つ目に、私のテンポを読んで、ポン、ポンの次の3つ目に私と同じテンポ感を持って手拍子していただけますか。お願いします。

(手拍子) できました。素晴らしいですね。簡単なんですけれども、今何が行われていたかと言ったら、まずこの間隔のインターバルを認知するという作業がありました。それを分析するという作業がありました。ポン、ポンと来たから、ポン、ポン、ポンはここに来るなど、それに必要なように、今度は運動神経、身体能力、的確に腕を動かして手拍子をするという活動がありました。ただここで学生にこんな話をすると、ちょっと大学の先生みたいですねと言ってくれるんですけども、誰が言うかという、数学科の学生です。ポン、ポンと来て、その後、頭の中で、この間隔でとやったときに、耳から脳に行くまでの神経組織の距離と、指と腕の先からの距離が違うので、自分ではたたいたつもりでも、ずれちゃうんですね。これを我々は小さいころから縄跳びをやったり、大縄跳びで入れない子っていましたよね。「お入りなさい」と言われて、入ってくれないと、みんなも入れよ早くみたいな。あと一番多いのは、歩いている学生が、同じ速さで歩けない学生がいると、「ねえねえ、手拍子やって」とやるんですけども、誰かの速さを分析して、同じ間隔で自分の体をコントロールするというのは、実は非常に難しい高等作業です。これを①とか②とか、この辺でずっとやっていきます。

数学科の学生ですから、何先生やっているの、やってくれたら、それをやるからと。できないんですね、これは。手拍子を回していくという、今ここでやってもいいですけど、不整脈みたいになります多分、すごく難しいです。それをずっと毎回の授業の中で60分間体験してもらって、ああじゃない、こうじゃない、できんなどか言って、できたというのをビデオに撮って見せて脅かしたりいろいろしながらやっていきまして、最後に自分でリズムをつくるというところ、これが前期あるいは後期の学期末の試験になります。具体的に言いますと、一人一人が2小節のリズムパターン、タンタカタンタカタンタタンですけども、これをつかって、最初は一人で個の活動ですが、それをグループの中でつなぎ合わせて作品として作り込んでいくという活動になります。

今、青文字でたたく場所を変えて音色を変化させるとか書きましたけれども、これは私のほうから一切出しません。学生がいろいろやっている中で、こうしてみよう、ああしてみようと、スマホで撮ってみたり、音楽棟のガラスの中に自分たちの姿を映してみたりしながら、ああじゃない、こうじゃないとか言いながら、こういう工夫をします。

私のおしゃべりだけだと疲れると思いますので。

(映像) これ、数学科の学生です。ちなみに、この太鼓は自分たちでつくりました。最後は、ドヤ顔です。もっといいのはあるんですけども、なかなかオーケーをもらえないんです。彼らは「見せてもいいよ」というので出してくれたんです。ほかの学生さんたちも、このグループも非常におもしろいんですけども、ちょっと時間がないので。いっぱいありますけれども、自分たちで、ああでもないこうでもない、1回か2回は必ずグループの中でけんかになります。「ちゃんとやろうよ、こうだよ」、「俺やっているよ」、やってない、できてないんです。やっているつもりだけど、ずれている。「おまえずれている」、「ずれてないし、おまえのほうがおかしいし」と、いいですね。

次、音楽科の学生の1年生の前期、一番最初の私の授業です。前にお示したようなもの、パワーポイントの配布資料がありますけれども、これを一番最初の授業で学生に配ります。来年度で言いますと、水曜日が入学式で木曜日から授業スタートですので、彼らは大学に入ってきて一番最初の授業で、私からこんな説教臭いことを言われます。「できる」と「できない」に気づくんだとか、「できていない」とか、自分自身をちゃんと客観的に見ましようみたいなことが書いてあります。

音楽の専科の学生ですので、先ほどの数学科の学生と同じようなことをやっていくんですけども、リズムパターンを自分たちでつくって、それを組み合わせて、音楽科の学生がやると、こうなります。ちょっと自慢です。(映像)

これも実はもっとすごいのがあるんですけども、なかなかオーケーをもらえないので、これにしました。この間、私は何をやっているかといったら、「はっ」として見せたり、「ふーん」と言ったり、「おおー」と言ってみたり、それだけです。さっきの大鹿先生と同じですね。もう本当に顔芸の世界みたいになっていくんですけども、枠はつくって、範囲は囲いますけれども、押しつけはしない。今はやりの放牧学習というんですかね。山へ連れて行って、帰らせないのはちょっとまずいけれども、放牧です。わからなくなりそうだったらアドバイスしますけれども、基本的には教えることはしません。昔はやっていたんです。順番を追って、こうやって曲をつくりましようと言って。そうしたら、私が好むような、同じような作品ばかりできてきたんです。これじゃだめだなんて思って、あるところから、放置まではいかないですけども、放牧学習に変わりました。必ず「教えてください」とか、「どうしたらいいですか」と言うから、「今はネットという便利なものがあるんだよ」と、その一言です。もうちょっとぐじゅぐじゅ言う学生がおりましたら、「私にその才能があったら、ここで教員をやっていない」と。作曲家として生きていきたいですし、夢の、何の話でしょう。

これももっとおもしろいのがあるんですけども、きょうはこのグループをご紹介します。

いろいろやってきて、1年生の前期と4年生の前期の一番最後のところでもう1回私の必修の授業があります。これが4年生の前期で、ここでは教材ビデオをつくるということを課します。通常の授業を8回から9回やって、最後のところでつくらせます。課題として書いたのがここにあるように、浜松市の楽器博物館に必ずゼミ単位で行って、仲がいい悪いいろいろありますけども、単位のために頑張れと言います。浜松市の楽器博物館に行くと、小学生または中学生対象の15分以内のプロモーションビデオをつくれ、これが課題です。いろいろ手順等が書いてありますが、私のほうから示すのはパワポの資料、後ほどごらんください。この教材成立条件の1、2、3、4、5、これをクリアすること。要するに、これで評価をしますというふうに言います。もう1つが、教材成立の4つのP、これをクリアしているかどうかで私が判断しますと言います。どういうふうに判断しますかと聞かれますので、私の個人的な主観で決めます。ただ小学校で本当に使えるのかなということを見てもらうために、附属の先生などにちょっと見ってもらったりして評価を出します。こちらのほうもビデオ制作に関しての細かい手順などは、私は一切教えません。インターネットというすばらしいものがありますので、自分で調べなさいと。これも昔は教えていたんです。同じようなものができてくるので、これは絶対教えないほうがいいと思って、放牧学習です。放牧学習って、いい言葉ですね。

実際どういうものができたかということを見てもらうために、最後にちょっとだけダイジェストで。これは今年の前期のものです。15分から3分弱にしています。(映像) カンペなどもつくってやっていたら、どこの業者かと疑われて大変だったそうです。これを毎年前期、愛知教育大学音楽科と称するグループが6つぐらいできますが、毎年行っています。

(映像) これ、小橋諒と出ていますが、○○○です。こういう形で、できています。これ、縦山鈴奈となつていますが、○○○○です。このあたりの微妙なセンスは、私にはないです。これも、杉山麻莉子となつていますが、○○○○○です。

ちょっと時間が来ておりますので、ここで終わりますけれども、最初に申し上げたとおり、アクティブ・ラーニングは、非常に指導者側の負担が大きいです。これが一つ。やるならかなりの覚悟が必要かなというふうに思いません。大学院でも時々やるんですけども、どうやるか方法を全く言ってくれない。ちょっと目が合っちゃいましたですね。ああ言えばこう言う、こう言えばああ言うみたいになって、ただ結果から見たら、非常におもしろいことになっていて、学修者からすれば、効果はあるんだと思うんですけども、教員の側はつらいです。さっき大鹿先生は、とっても楽ですと言われましたけれども、その90分間我慢するという忍耐力は、精神修養の場としてははい

いかかもしれないですけども、非常につらいです。ただ、これをやっていきたいと思いますということですから、その中で自分がいかに学生にとって効果があるものを考えていきたいなというふうに思っています。

今、タイムプラスで出したのは失敗でしたね。みんな私の話を聞いてくれないという。

まとめに入ります。どうしても我々音楽の教員というのは、自分の価値観の押しつけになっちゃうんです。でも、自分がいいと思わなかったものの中にすばらしいものがあるかもしれない。このきっかけが、私自身が、30年以上前ですけれども教育実習に行ったときに、「展覧会の絵」の「キエフの大門」という非常に高尚な音楽をかけたときに、絵を描きましょうと言ったら、コーヒーカップの絵を描いた子がいたんです。そこにいた音楽の先生、担任の先生みんなが、教育実習の学生さんがこんなに一生懸命授業をやっているのに、コーヒーカップの絵なんか描いたら、あなたはだめでしょうと言ったんですけれども、私はもともとちょっと変わった子でしたので、わかりました。ネスカフェゴールドブレンドに当時、お城が出てくるコマーシャルで「展覧会の絵」が使われていたんです。この子はそれを知っていて、私にわかるメッセージで描いてくれたんだなと。だから、一般の先生からしたら、お城のような絵を描いた子を褒めて、コーヒーカップに湯気がびよーんびよーんびよーんと3本、何だこれとなるんですけども、そういう価値観の押しつけだけはしたくないなと思っています。そのために音楽という授業の中でどうしたらいいかということで、アクティブ・ラーニングを考えてきました。

アクティブ・ラーニングの概念規定とかというお話はできなかったんですけども、音楽といっても、こういう授業で頑張っているんだということをご理解いただいて応援して下さったらうれしいです。

以上で終わります。ありがとうございました。

#### 《質疑応答》

##### ○司会（幅）：

ありがとうございました。

それでは、ご質問等お願いいたします。

##### ○質問者8：

メールを送りつけた者です。ありがとうございました。

つくる活動が、最後ビデオまでつくられていて、非常に私は驚いて見ておりました。前半の大鹿先生のほうでも評価という話があったので、先生にもぜひお聞きしたいと思うんですけども、一般の学生や1年生を対象にした授業で、リズム制作をするというようなことをされているんですけども、つくる部分の評価というのをどのようにされているのかということと、これは協働とかそういう活動での評価の課題なんですけれども、プロセスの評価とか、そういうものは考えていらっしゃるのかなというところをお聞きできればと思います。

##### ○新山王：

ありがとうございます。技能系教科ですので、私の場合は、「できる」「できない」での評価はいたしません。作品もいいものができたからという評価は一切しません。活動にどのぐらい参加しているかというのを見ます。それから、後半60分ぐらいの活動の中で、ずっと各グループを回るんです。その中での発言とかやりとりを全部メモします。最初の2～3回は、私が行くとみんな黙るんですけども、そのうちそうも言ってもらえなくなるので、いろんなことを言うようになります。最初のころは、私も失敗して、いい意見が出ると、「あ、それいいね」と言ってしまうたりしたんです。そうしたら、そっち一色になっちゃうんです。あえて今は逆のことを言ったりして、何かびっくりするような意見が出て、「おもしろいかもしれないね」と。今私のことを「どんちゃん」と学生が呼ぶんですけど、「どんちゃんがおもしろいと言った、何でだろう」と、そこから回りが始まるんです。評価は、これも大変です。毎回毎回メモをとります。カルテみたいなものをつくるんですけども、早く放たれたいです。

##### ○司会（幅）：

ほかにご質問等ありましたら、お願いします。

○質問者 9 :

ありがとうございました。先ほどから何度も目が合った院生です。

1点ちょっと、今の評価ということに関連してお聞きしたいんですけども、先ほど音楽科の方の映像が流れたときに、「あ、すごいな」と僕自身思いました。何がすごいのかなと考えたときに、ここがすごいんだよと僕知識の中でなかなか説明できなかつたんですが、学生の中で、例えばその発表を見たときに、すごいよという部分を例えば共有して学ばせるとい活動などは行っているのかなと。学生の間で共有するという部分についてお聞きしたいなと思って質問させていただきました。

○新山王 :

ありがとうございます。

「すごい」は人によって違うし、いろんなすごいがあるんです。共有ということはしませんけれども、グループの中で誰かが「これすごい」と言ったら、「何がすごいんだよ」みたいな話になっていきます。そこで、若いころ、私は説明していました。これはこうこうでねと。それやっちゃだめなんですね。言われた側は、腹が立つなら説得しろと言います。聞く側も、聞こうとしようよと。「わからん、わからん」じゃなくて、わかろうとしようよという話をします。

評価をどうしているかと言われると、悪い評価を出していないはずですので。今、1年生のほうはそういう評価です。4年生、大学院の授業のほうは、プレゼンでしたよね。どういうふうに評価しているかと言ったら、きょうは話しませんでしたが、プレゼンを私が聞いて、つくるまでの間に何度もやりとりしましたよね。その中で、「あ、これおもしろいな」ということに発表者がどのぐらい気づいているかによって評価します。「ああ、ここがおもしろいのになんて気づかないのかな」と言って、これは時がかかるんだろうなと思ったりします。そこで、「君、これもいいけど、こっちのほうがいいよ」と言っちゃうと、うまくいかないの、そういう場合、プレゼンのほうの評価をどうしているかと言ったら、すばらしいところ、おもしろいところ、そういう着眼点を本人がどのぐらい自覚しているかによって評価をしています。だから、こちら商品も売るようにすばらしいプレゼンをやったからということでもいい評価ということにはならないです。

○質問者 9 :

ありがとうございました。

○新山王 :

わかりましたかね。価値に気づいたかどうかです。新たな価値をつくることができたか、それで評価しています。

○司会 (幅) :

ほかによろしいでしょうか。

○質問者 10 :

おもしろい発表ありがとうございました。浜松の楽器ミュージアムに行ってビデオをつくるのか、すごい発想がおもしろいなど。先生がどんなことを考えて授業をつくっているのかなというのを聞きたいなと思いました。

○新山王 :

現場に出て、「新しく来た人いいね」と言ってもらえるということがあります。きょう、ぱっと見たら、音楽の教員5人の中から、この部屋に3人もいて、出席率は非常に高いと思うんですけども、恐らくどの教員もそうだと思います。「ああ今度の先生、来てもらってよかった」と言ってもらえるようにするにはどうしたらいいかということで、現実的にこのビデオをつくるという技術は非常に高く評価されます。私がつくっても、実はこんなにうまくいかないんです。音と合わなくてもいいじゃんかの世界になっていくんですけども、音と合わないとか、何でこんなところにエネルギーを使うんだろうというような、でもこれが将来働き始めたときに、子供たちにとっていいことになるだろうし、一緒に働く先生方にとってもお役に立てるのかなと思ったりしています。

音楽の授業もそうです。「できる」「できない」を目指していたら、音楽を嫌いになっていくばかりなんです。音楽を通じて何をできるようにするか、何を自覚するか。「あなたできているじゃない」、「あっ本当だ、俺できている」と、これを音楽の学生さんたちに気づいてほしいと思っています。

なお言うと、うちに入ってくる音楽科の学生って、とっても素直なんです。言われたことは何でもやります。逆に、言わなかったことはしません。これを4年間で何とかしたいという思いがありました。きょう来ているあのお2人の先生も同じことだと思います。指示すれば物すごくまじめにやるんだけど、指示しなきゃ何もやらない。「あんた一体どんな演奏がしたいのか自分で考えて」と言うと、「さあ、わかりません」で終わってしまう。それじゃ何年か後に子供たちに音楽の授業をするというときに、うまくいかないんです。どこから来ているかと言ったら、働き始めて困らないようにするという親心というか、ジジ心の年になっているんですけども、その思いだけです。わかりましたでしょうか。

○質問者 10 :

ありがとうございました。

○司会（幅） :

ほかに何かありましたらお願いします。よろしいでしょうか。

それでは時間となりましたので、ここまでにしたいと思います。新山王先生、ありがとうございました。

それでは最後に、「本学が目指すアクティブ・ラーニングについて」、野田先生からお願いいたします。

## 第四部「本学が目指すアクティブ・ラーニングについて」

講師：野田敦敬（教職キャリアセンター長）

それでは、お疲れのところ、あと10分～15分ほど、よろしくお願いします。

最初に伊東先生から、プレゼンの中でポンチ絵がありまして、このプロジェクトは6年間で、やっと初年度が終わるところですけれども、そのポンチ絵の中に、教職キャリアセンターが真ん中に位置づけられています。最初、メンバーの5人、6人の先生方が熱心に取り組んでいただきまして、申しわけないですけれども、全くノータッチでおったところが、12月ぐらいのプロジェクトの会議から、出てこいという話になりまして、それから、一緒に参加をさせていただいて、勉強させていただいております。

プロジェクトを進める中で、アンケート結果、結構いい結果が出ていたんですけれども、その結果は文科省の定義、きょうの私の最後のペーパーの中にも冒頭に書いてありますが、それをもとに一応、こういうのがアクティブ・ラーニングですよというふうに示させていただいて、アンケートをとったんですけれども、本学ならではの定義をつくって、もう一度とってはどうかというような意見もございました。そこから私が参加するようになりました。

それで実は、このプロジェクトは6年のプロジェクトなんですけど、1月末に第2期の大学評価機構のヒアリングというのが東京でありまして、学長、理事の皆さんのお供で私も参りました。教育関係が聞かれることが多いので、私もついてこいということで行きました。その冒頭のところでアクティブ・ラーニングのことについて、かなりの時間で聞かれました。要するに、88%、55%やっているというデータが向こうに渡っていますので、なぜそんなに高いのかということもまず聞かれました。調査方法は先ほどの方法で調査されたんですけれども、私が回答したのは、きょうも本学を代表する教科教育の両先生が日ごろ取り組まれているような、かなり前からやってみえるアクティブ・ラーニングを披露していただきましたけれども、教員養成の授業の構造とどういいますか、特徴とどういいますか、グループワークだとか実習、実験等が多いので、こういうデータが出たと回答しました。ただ、今後は質の充実に向けて取り組んでいく必要があるというような回答をしてきました。そういう意味でも、評価機構のほうからもかなり注目が集められています。

それで、きょう定義というわけではなくて、定義を考えようとしたんですけれども、なかなか定義となると、文科省の定義もすごく網羅的なものですよね。何でもひっかかってくるような定義になっていますので、結構難しいということがわかりました。そこで、ちょっと方向性を変えて、きょうはお諮りをしたいと思います。したがって、きょうの表題も、「本学が目指すアクティブ・ラーニング（案）」というふうにしてありますので、ぜひこの時間に多くの方々から、これからまだ先が長いので、こんな方向でぜひ取り組んでいってほしいというご意見をたくさんもらうきっかけとしたいなと思っています。そのとおり全部いくかどうかわかりませんが、たくさんの方々から意見をいただければなと思っています。既に（質問者7）先生からはご意見をいただいておりますし、ほかの先生方もああいう感じでご意見をいただければなというふうに思います。

それで、プロジェクトで考えましたのは、本学の教育課程は非常に多様な授業科目で構成されているわけです。なので、一律に目指すアクティブ・ラーニングを示すのは非常に難しいだろう。そこで、何か観点が必要だろうということで、中教審が示しました「主体的・対話的な深い学び」、この3つのキーワードと、それから、教員養成大学ですので、それならではの4つのポイントで、特に文科省の定義の中にある言葉を使いながら、当然補わないとできませんので、我々勉強させていただいた言葉を補って、4つの観点で一応観点をつくりました。最後のほうに書いてありますけれども、各授業では、今からご提案申し上げる、例えば主体的な学びの観点に重点を置いて展開を捉えてもいいし、次の観点でもいいし、あるいは1回目と2回目はこの観点で、3回目と4回目は次の観点という形で、そういう指針になればという形で、これを全部目指していただくというわけではございません。書き方として、何とかかんとかすることで、何とかとなる、できる、なっているというふうに評価規準風にまとめました。



1つ目、まず主体的な学びの視点でございます。ここでは、「自らが」というキーワードで、「授業内容等から学修者自らが課題を発見し、その課題の解決に向けて、問題解決学習、体験学習、調査学習等を行うことで、認知的、倫理的、社会的な能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力が育成されている」ということで、汎用的能力を自ら取り組むことで育成していこうという主体的な学びの視点でございます。

次に、対話的な学びの視点。これは既に「対話的な」ということがこれまでのやりとりの中でも話題になってきていますけれども、最初の定義の中で、主体的・協働的でしたが、いつの間にか文科省が方向性を変えまして、主体的・対話的となりました。これは私見ですけれども、協働的というふうに最初したものですから、要するに、個別学習、グループ学習しておればアクティブ・ラーニングだというのが広がっていったというものが少し問題になっていたんじゃないかなというふうに思います。対話的というのは、私の専門の総合的な学習なんかでは、別に人と対話しなくても、資料との対話でもいいし、過去の自分を振り返って対話するというのも対話的というのに入ってきています。これは教科によって捉え方が違うかなと思いますが、一般的にはここに書きましたように、「学修課題及び修得した教養、収集したデータ、体験等について」、何かもとがあるわけですね。「グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等を行うことで、より個人の学びが深まっている」。要するに、対話することによって、グループの学びではなくて、個人の学びが深くなっていくということがポイントかなというふうに思います。

次に、深い学びの視点。これがなかなかこれから多分、各教科の解説書が出ますけれども、その中でどの程度定義されるのか、まだ出てないのでわかりませんが、このあたりはかなり意見が分かれるところではないかなと思っています。まず、我々はこういうふうに書きました。「単に断片的な知識や技能等を習得するのではなく、主体的及び対話的な学びの過程で、学修者の思考が活性化されることで、知識や技能等の関連が図られ、新たな概念化することができている」ということで、断片的な知識だけでなく、それを何かまとめた一つの今後活用できるような概念的な知識ができるというところをポイントに置きました。

それから、教員養成としての視点ということで、やっぱり学生がアクティブ・ラーニングができるような教師になっていく必要があると思いますので、まずは、きょう提案いただいた両先生がやっていただいたように、アクティブ・ラーニングのよさ、アクティブ・ラーニングとは言っていないというふうに新山王先生は言われましたけれども、そういう学習形態、学習スタイルの価値を実感することで、自分が教員及び教育支援専門職に就いたときに、そういった学びを実践できるようになっているかどうかということの一つの教員養成としてのポイントとしました。

今後、プロジェクトで話し合っているのは、それに向けて、教員養成としての視点を充実させるために、学生向けの手引書をつくらうではないかという方向性も実は持っています。この間の会議で、教科によってかなり違うので難しいのではないかなというような意見も出ていましたけれども、ちょっとまた検討させていただきたいなという途中経過でございます。

最初に申しましたように、この4つの視点をどの授業でもどの回も全部取り上げるわけではなくて、先生方が担当してみえる授業の特色を出していただき、そして、15回の中でもいろんな場面が出てくると思いますので、大鹿先生も4回ごとに協働学習を入れてみえる。そのほかのところは違う形だと思いますので、そういった重点を持って取り組んでいただきたいなど。そして、どういうふうに展開してきたかということで、こういった全学FD集会の機会やら、今年も授業公開週間を前期に1回、後期に1回、1週間ずつ設けさせていただきましたので、そのときにぜひ公開いただいて、ディスカッションできたらなというふうに考えております。

ちょっと時間も少なくなりましたが、先ほど最初に申しましたように、今後の方向に向けてたくさんのご意見をいただきたいと思います。

以上です。

《質疑応答》

○司会（幅）：

ありがとうございます。ご質問、ご意見等ありましたらお願いいたします。

○質問者 11（A先生）：

特に美術の場合、アクティブ・ラーニングという言葉が出てきたら、昔からやっていたんだみたいなのがちょろちょろ出てき出して、何かと言ったら、昔から自由表現をやっていたという、アクティブ・ラーニングと正反対の考え方が出てきているんです。そこで私思ったのは、文科省の定義がありますよね。「主体的な学び」というのが主語になりがちなんですけど、その後ろにある「育成」というほうが実は重要なんじゃないかと思うんです。教育者としては「主体的な学び」ではなくて、「主体的な学びの育成」、全て「育成」がかかると思うんです。そうすると、さっきの4つの視点、「主体的な学びの視点」じゃなくて「主体的な学びの育成」、「対話的な学びの視点の育成」、全部「育成」が主語のような気がして、文科省の総合的学習の時間の当初の1998年、あのときも「育成」という言葉が必ず入っていたし、改訂版にも「育成」という言葉がかなりいっぱい入ってきているので、意外とアクティブ・ラーニングというのは、「主体的な学び」じゃなくて、「主体的な学びの育成」、私はそっちのほうを強調して教育現場に行かないと、特に私の美術の場合は、自由表現がアクティブ・ラーニングみたいに思われちゃうので、ちょっと気をつけたいなと私自身は思っています。

質問じゃなくて意見になっちゃって済みません。

○質問者 12（B先生）：

すみません、いつも同じことを言っているんですが、最後のところで、教員養成としての視点というのがあります。書かれた文章の中に、「教員及び教育支援専門職に就いたときに」というような表現もございます。本学が教員養成のみの大学であるかどうかということについての議論がちょっと必要ではないかなと私自身は考えます。

そういうような立場に立ちますと、例えば、「未来につなげるための視点」、「未来の子供たちを育てる視点」というような言い方、あるいはもうちょっと言うと、「未来の大人たちにつなげる視点」、何を言っているのかなと私は思いましたけれども、何らかのもう少し幅の広い、私たちは子供を育てて次の世代に伝えていくんだよという視点、そんな文章がいいのかなという気がしました。

以上です。

○質問者 13（C先生）：

1つ高校、大学内で話をされるときに、小学校や中学校の学習指導要領等で言われている対話的を使うのか、それとも大学教育に対して言われてきていて、本プロジェクトでも使われている協働的ということで進めていかれるのか、多分その用語を使うところの違いだけでも大きな影響があるように思いますので、ぜひ検討が進むといいなと思っていますのでよろしくお願いします。

○質問者 14（D先生）：

今、C先生がおっしゃったところと少し関連するんですが、対話的な学びの視点というところで、さっき野田先生がおっしゃったように、より個人の学びが深まるということは僕は非常に共感するんですよ。そういう方向性を目指したいと。ただ、その手法の1つとして、ディスカッションだとか、ディベートだとか、グループ・ワークというのがあるのであって、別にそれがなくなっても、個人の学びを深める手法はあるんです。ですから、対話的という言葉、もしくはグループ・ワークとかそういう言葉が、今のこの形では非常に目立ってしまっていて、ちょっとその辺が誤解を与えるというか、そういうふうになるんじゃないかなというふうに僕は考えています。

私個人としては、恐らく最大のアクティブ・ラーニングというのは、多分研究だと思うんです。要は、修士研究、卒業研究をしっかりとやるということが究極のアクティブ・ラーニングだと個人的には思っています。もちろん、その中に対話も入ってくるんですけども、やっぱり個人をどのようにして伸ばすかということがもうちょっと伝わるような内容にしていきたいなと思います。 以上です。

○司会（幅）：

あと意見等ございますか。

○質問者 15（E先生）：

一番最後の教員養成としての視点のところの最後に、「自らが主体的で対話的な深い学びを実践できるようになっている」というのは、これが教員自身なのか、それとも生徒に対してそれを与えるのかというのがちょっと両義的な書き方でわかりにくいと思って、僕はどちらかという生徒のための学びのできる環境をつくることが考えられるとか、実践できるとか、そういうほうが教員養成としての方向かなと考えていて、意見として述べさせていただきました。

以上です。

○質問者 16：

自分も教員養成のところなんですけど、アクティブ・ラーニングの価値を学生自身が実感することは確かに学生にとって大きなメリットかなとは思いますが、ただ、学生自身が今後、教員になったときに、アクティブ・ラーニングを実際現場でできるかと言われると、価値を実感してもちょっと疑問が残っているというか、自分自身もそこが結構不安で、例えば授業じゃなくてもいいんですけど、学生自身がアクティブ・ラーニングの授業を実践して、要は先生側に立つ機会を学校の中で与えていただけるとうれしいなと自分は考えています。

以上です。

○司会（幅）：

ほかにごいませんでしょうか。

○質問者 17：

すみません、先ほどD先生が言われた、僕の解釈が間違っているのかもしれませんが、さっき野田先生は、協働的から対話的に変化したと言われたましたが、僕の理解が違っていたらごめんなさい。OECDのキー・コンピテンシーからの流れを考えると、対話的というのは、協働学習ともちろんイコールではなくて、先生方よくご存じだと思いますが、極端な話、自分との対話、それから、例えばメディア接触に対してのメディアとの対話、ここであろうとインターネットとかも含めて、何かそんなようなニュアンスを強調したいがために置きかえたのではないかというのが私の理解です。だから、先ほど卒業研究ということがありましたが、やはり個人の中での深まりを持ってということも実は対話的な学びの中の一つの部分として入るのかなと、またツールとしての言語というのも出てきますし、ちょっとごめんなさい、僕の理解が浅いのかもかもしれませんが、何となく対話的という言葉が違う立場に立っているなというふうな理解をしております。間違っていたらごめんなさい。

以上です。

○司会（幅）：

ほかにご意見、ご質問等はございますか。

○野田：

何人かのご意見ありがとうございました。

まずA先生から、「視点」ではなくて「育成」というポイントが大事ではないかということ。それから、B先生から、教員養成をもう少し枠組みを拡大して、未来につなげるという視点が大事ではないかと。それから、プロジェクトの主題は協働的なんですけれども、ここでは対話的というふうに述べていますので、どちらを使うのかは吟味が必要ではないかということ、そのとおりだというふうに思っております。

それから、この対話的については、やっぱりいろんな捉えがあるようで、もう少し個人をどう伸ばすかという観点をわかりやすく示してほしいと、D先生からいただきました。

あとE先生からいただいた「実践できるようになっている」というのは、この文面では少しわかりにくかったかもしれませんが、**「教員及び教育支援専門職に就いたときに」**ですので、学生という形でこれはつくっているつもりです。

院生の方からもいただきました。教育実習なんかとてもいい機会だと思いますけれども、教育実習に向けて、それなりの授業を積み上げればなというふうに思っています。

たくさんご意見いただきましたので、今後また来月プロジェクトの会議等もありますので、検討していきたいなと思っています。ありがとうございました。

**○司会（幅）：**

それでは長時間ありがとうございました。

最後に閉会のご挨拶を野田先生からお願いします。

**○野田：**

今かなり閉会的な挨拶をしたんですが…。きょうは院生、学生の皆さん、それから、先生方はもちろん、80名近い方にご参加いただきました。小学校の先生もわざわざ来ていただきましてありがとうございました。本当に1年が終わったところで、1年はばたばたしながらということでもございましたけれども、2年目、3年目、本格的に進めなきゃならないなというふうに思っております。

また先ほど公開授業の件やら、それから、これからもFD集を開いていきたいと思っておりますので、それで積み上げをしていきたいなというふうに思っています。やっぱりポイントは、学生たちが社会に出たときに、この思想を持って展開できるような、そんな授業の積み上げが日々大事ではないかなというふうに思っています。

差し当たりまして、ちょっとまだいろんな会議を通ってないので、決定ではありませんけれども、5月末の水曜日に、「〇〇教育とICT」という形で、またアクティブ・ラーニング的な集を開く予定でおります。5月31日の午後、諸会議を通して決定していきますので、多数ご参加いただければと思います。

きょうは、ちょっと延長しましたがけれども、ありがとうございました。以上で終わります。（拍手）

（終了）

## ○第一部 アクティブ・ラーニングアンケート結果の報告

### はじめに

本報告は、教職キャリアセンターが主体となって、2016年に実施した「アクティブ・ラーニングについてのアンケート」の集計結果をまとめたものである。

#### 1. アンケート調査の概要

##### (1) アンケート調査の目的

第3期中期目標・中期計画における本学の重点目標の一つは、大学教育を通じてアクティブ・ラーニング（以下、AL）の学びを積んだ学生が、学校現場で能動的学修方法を展開できるように養成することである。そのための体制を全学的に取り組むために、ALを取り入れた授業を学部課程、大学院課程ともに全開講授業の6割以上で導入することを目標としています。

本年度採択の「主体的・協働的な学び」を实践できる教員の養成プロジェクトは、ALを導入した新しい学習指導方法を開発し、学校現場でALを实践できる教員を養成することです。本プロジェクトの実施主体である教職キャリアセンターは、本学で授業を行う全教員に対してALに関するアンケート調査を行い、教員のALに対する認識と現状を明らかにしたい。アンケート調査の結果から、本学でのAL授業の現状、ALを導入する上での課題を整理し、本プロジェクト遂行に向けた材料としたい。

##### (2) アンケート実施期間

2016年 7月14日～7月31日

##### (3) アンケート対象

愛知教育大学で授業を担当する大学教員と非常勤講師

##### (4) アンケート調査の方法

アンケート対象者に依頼文と共にアンケート調査の紙媒体を各講座代表に送付し、講座代表が各講座教員に配布し、各教員は所属学系事務室に提出する。非常勤講師の先生は、各学系の連絡メールボックスに配布し、学系事務室に提出する。

## 2. アンケート内容

配布したアンケート用紙を下記に示します。

### アクティブ・ラーニングについてのアンケート調査

所属 \_\_\_\_\_

氏名 \_\_\_\_\_

問1 アクティブ・ラーニングという「ことば」を知っていますか？☑を入れてください。

- かなり知っている
- ある程度知っている
- 最近、耳にするが、詳細は知らない
- 全然知らない

下記の文部科学省によるアクティブ・ラーニングの定義をお読み頂きアンケートに回答をお願いします。  
また、授業科目については、**昨年1年間に開講した授業**を対象とします。

【アクティブ・ラーニング(以下、AL)の定義(文部科学省、2012)】

教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学修法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決型学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングである。

問2 担当している科目に、ALの要素を含む授業はありますか？☑を入れてください。

- ある
- ない

「ある」と回答された方

問3 担当している全科目(学部と大学院)の中で、少しでもALの要素を取り入れた科目はいくつありますか？

担当する学部授業全科目  コマのうち  コマにAL導入  
担当する大学院授業全科目  コマのうち  コマにAL導入

問4 同一科目の全授業回数(16回)の内、ALの要素を取り入れた授業の平均回数はどの程度ですか？☑を入れてください。(科目により回数が異なる場合、最大の平均回数を回答して下さい)

- 1, 2回
- 3~8回
- 9回以上

問5 授業の中でALの要素を取り入れている授業形態を教えてください。☑を入れてください。(複数回答可)

- 学生参加型授業(クリッカー、感想・質問カードの使用など)
- 学生の共同授業(グループワーク、グループディスカッションなど)
- 教員や学生が問題設定をし解決する(問題発見・解決型学習など)
- 野外実習、体験実習、調査学習など
- その他(以下に記入)

「ない」と回答された方

問3 現在、ALの要素を授業に取り入れられない理由について、☑を入れてください。(複数回答可)

- 授業準備が大変
- 授業方法がわからない
- 科目内容に依存するから
- 学生のためにならない
- その他(以下に記入)

問4 今後の予定について、☑を入れてください。

- 今後、授業にALの要素を導入する予定である
- 今後、授業にALの要素を導入してみたい
- 今後、授業にALの要素を取り入れるか迷っている
- 授業にALの要素を取り入れる必要はない
- その他(以下に記入)

裏につづく

「ある」と回答された方

問6 授業にALの要素を導入するとき、工夫した事は何ですか？☑を入れてください。(複数回答可)

- 授業方法
- 教材
- ICTの利用方法
- 教室の設備利用方法
- その他(以下に記入)

問7 ALを含む授業の今後について、☑を入れてください。

- 増やしていく
- 現状のまま
- 減らしていく
- その他(以下に記入)

「ない」と回答された方

問5 導入する予定あるいは導入してみたいALの授業形態について、☑を入れてください。(複数回答可)

- 学生参加型授業(クリッカー、感想・質問カードの使用など)
- 学生の共同授業(グループワーク、グループディスカッションなど)
- 教員や学生が問題設定を解決する(問題発見・解決型学習など)
- 野外実習、体験実習、調査学習など
- その他の授業形態(以下に記入)

問6 今後、授業にALの要素を導入するとき、授業者として課題となりそうな事に☑を入れてください。(複数回答可)

- 授業方法
- 教材
- ICTの利用方法
- 教室の設備利用方法
- その他(以下に記入)

アクティブ・ラーニングについてご意見等ありましたらご記入ください。(自由記述)

アンケートご協力ありがとうございました

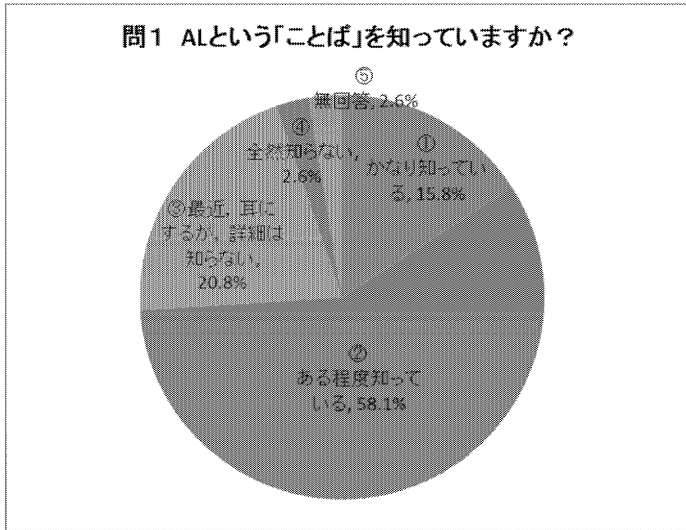
### 3. 結果

#### (1) アンケート回収率

選択肢	教育科学系			人文社会科学系			自然科学系			創造科学系			計
	教員	非常勤	無記名	教員	非常勤	無記名	教員	非常勤	無記名	教員	非常勤	無記名	
配布枚数	64	44		60	66		61	29		52	44		420
回収枚数	34	27	1	45	37	3	47	14	4	35	18	0	265
%	57.4%			67.5%			72.2%			55.2%			63.1%

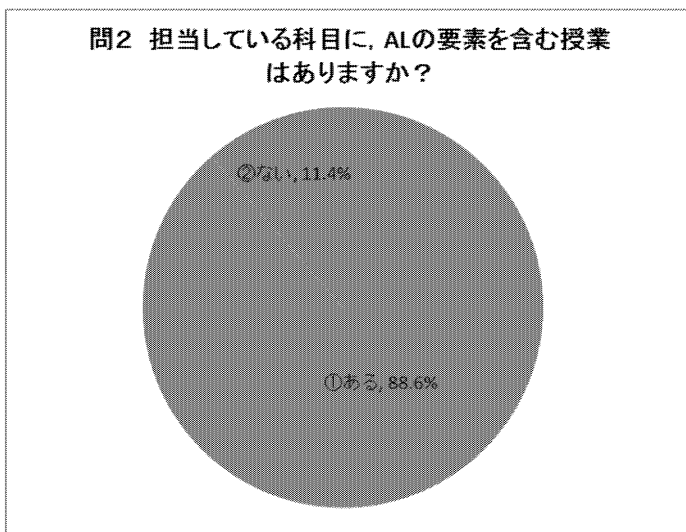
#### (2) アンケート結果

##### 問1 アクティブ・ラーニングという「ことば」を知っていますか？



選択肢	%	回答数
① かなり知っている	15.8%	42
② ある程度知っている	58.1%	154
③ 最近、耳にするが、詳細は知らない	20.8%	55
④ 全然知らない	2.6%	7
⑤ 無回答	2.6%	7

##### 問2 担当している科目に、ALの要素を含む授業はありますか？

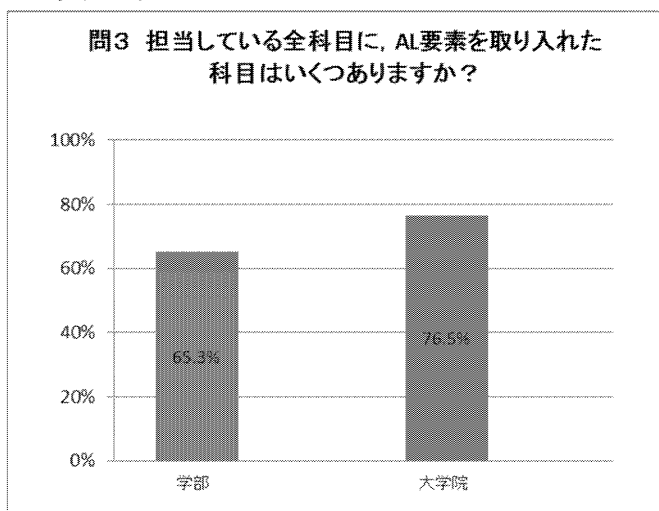


選択肢	%	回答数
① ある	88.6%	233
② ない	11.4%	30



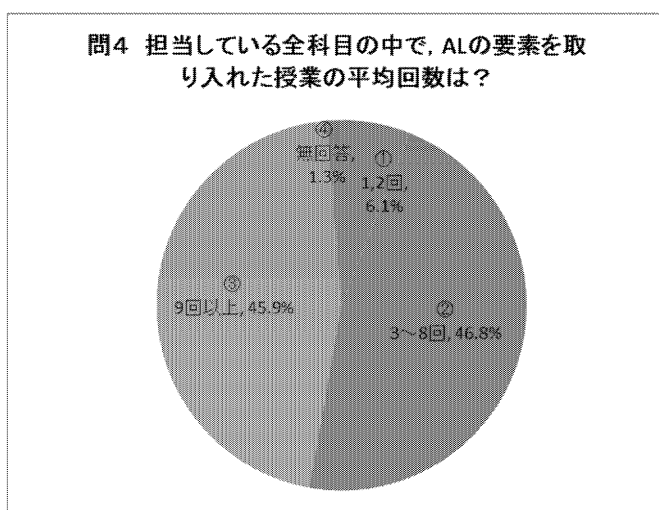
## 「担当している科目に、ALの要素を含む」と回答した教員のアンケート結果

**問3 担当している全科目（学部と大学院）の中で、少しでもALの要素取り入れた科目はありますか？**



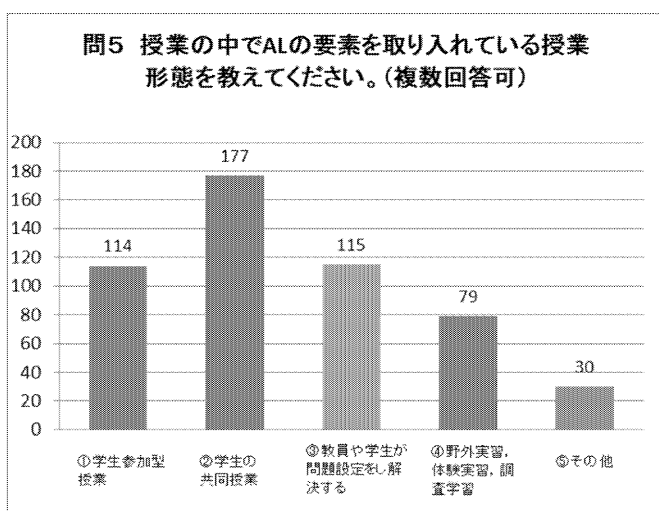
選択肢	%	回答数
①学部 AL導入	65.3%	966/1479.7
②大学院 AL導入	76.5%	244/319

**問4 同一科目の全授業回数（16回）の内、ALの要素を取り入れた授業の平均回数はどの程度ですか？**



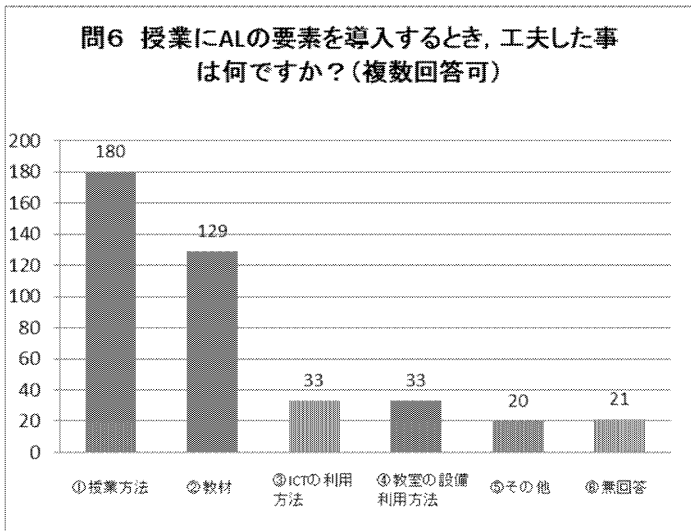
選択肢	%	回答数
①1, 2回	6.1%	14
②3~8回	46.8%	109
③9回以上	45.9%	107
④無回答	1.3%	3

**問5 授業の中でALの要素を取り入れている授業形態を教えてください。（複数回答可）**



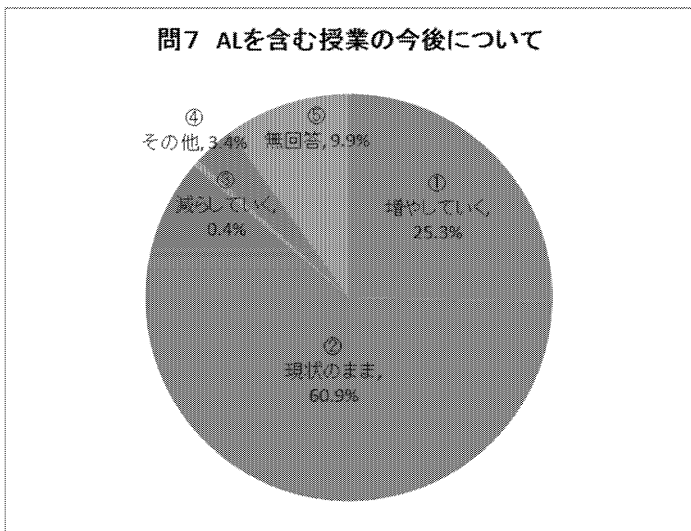
選択肢	回答数
①学生参加型授業	114
②学生の共同授業	177
③教員や学生が問題設定をし解決する	115
④野外実習、体験実習、調査学習	79
⑤その他	30

問6 授業にALの要素を導入するとき、工夫した事は何ですか？（複数回答可）



選択肢	回答数
①授業方法	180
②教材	129
③ICTの利用方法	33
④教室の設備利用方法	33
⑤その他	20
⑥無回答	21

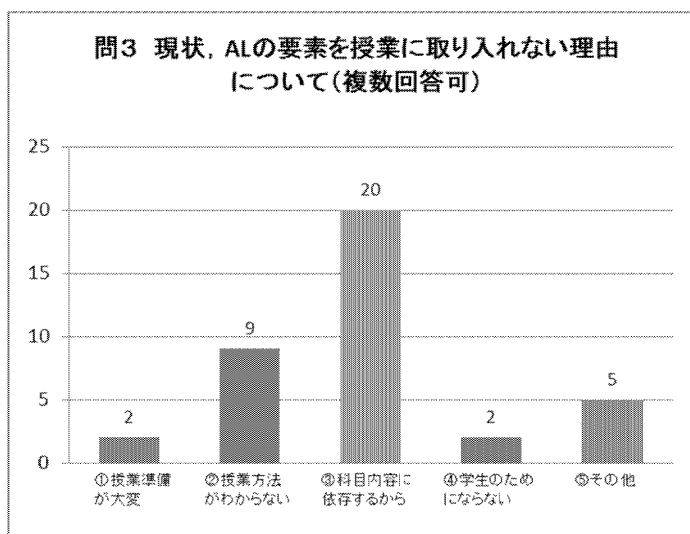
問7 ALを含む授業の今後について



選択肢	%	回答数
①増やしていく	25.3%	59
②現状のまま	60.9%	142
③減らしていく	0.4%	1
④その他	3.4%	8
⑤無回答	9.9%	23

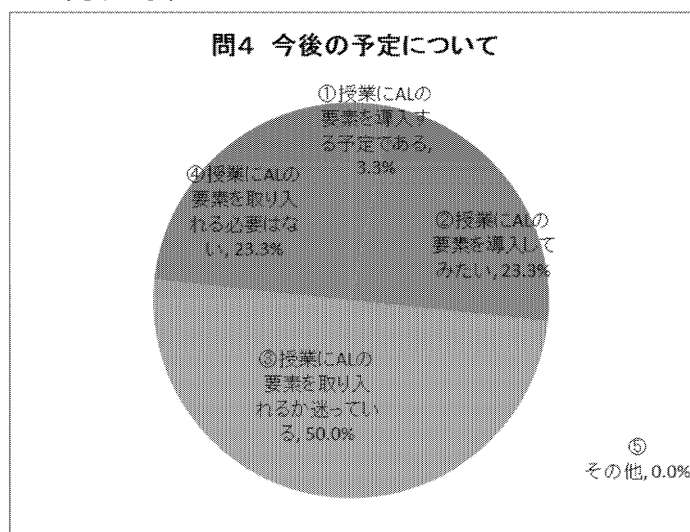
## 「担当している科目に、ALの要素を含まない」と回答した教員のアンケート結果

### 問3 現状、ALの要素を授業に取り入れない理由について（複数回答可）



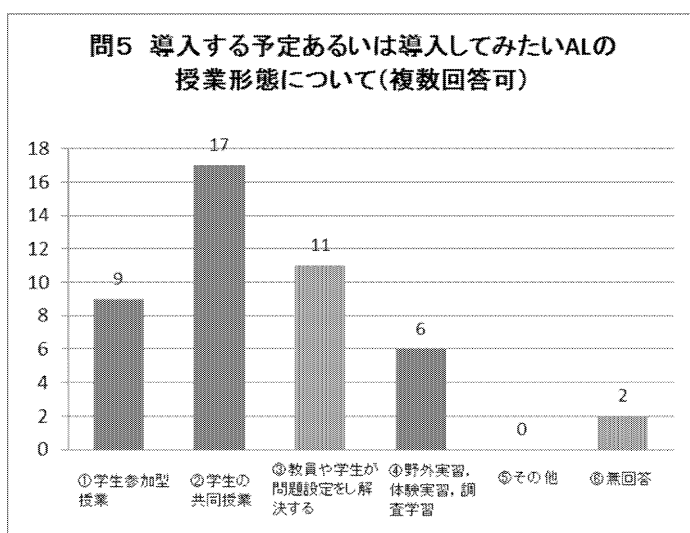
選択肢	回答数
①授業準備が大変	2
②授業方法がわからない	9
③科目内容に依存するから	20
④学生のためにならない	2
⑤その他	5

### 問4 今後の予定について



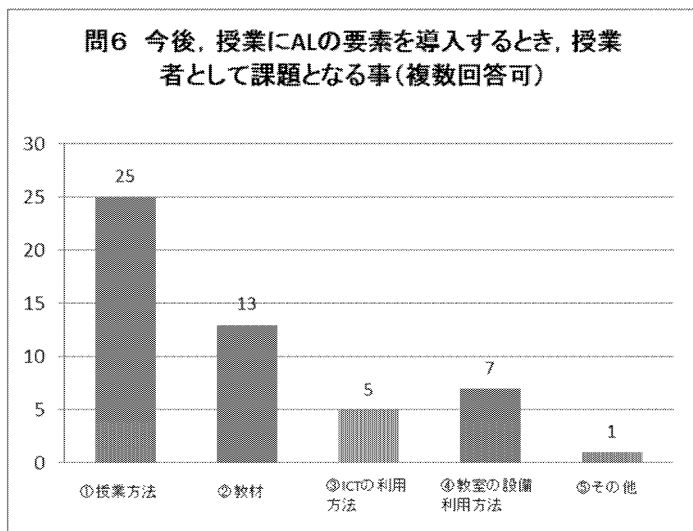
選択肢	%	回答数
①授業にALの要素を導入する予定である	3.3%	1
②授業にALの要素を導入してみたい	23.3%	7
③授業にALの要素を取り入れるか迷っている	50.0%	15
④授業にALの要素を取り入れる必要はない	23.3%	7
⑤その他	0.0%	0

### 問5 導入する予定あるいは導入してみたいALの授業形態について（複数回答可）



選択肢	回答数
①学生参加型授業	9
②学生の共同授業	17
③教員や学生が問題設定を解決する	11
④野外実習, 体験実習, 調査学習	6
⑤その他	0
⑥無回答	2

問6 今後、授業にALの要素を導入するとき、授業者として課題となりそうな事（複数回答可）



選択肢	回答数
①授業方法	25
②教材	13
③ICTの利用方法	5
④教室の設備利用方法	7
⑤その他	1

### (3) 自由記述

#### ○教育科学系

##### 《賛成意見》 10件

- ・海外の大学では、ALは多く取り入れられています。本学でも積極的に取り入れていくべきと考えます。
- ・私は、幼児教育に携わる者です。ぜひ、本学でALを推進し大きな成果を挙げてほしいものです。かねてより、幼児教育現場では、鼓笛隊であったり、和太鼓、跳び箱、逆立ち歩行など、およそ教育（特に幼児の発達に悪影響を与える保育内容）とは無縁な技や知識（漢字、百人一首）の習得が喜ばれてきた現実があります。「生きる力」に基づく、本当に人間らしい育ちを取り戻すチャンスがやってきたように思います。教え込むだけが教育ではない。（もちろん、教えることも大事ですが）期待しております、私自身も授業で導入していきたいと考えます。
- ・学生が本気になって話し合い等に参加するようなALのあり方をさらに探していきたい。
- ・学生はグループディスカッションなどを実施することで、積極的に課題や講義内容と向き合うことができていると考える。「学生同士の意見交換で視野が広がった」「より深く考えることが出来た」「参加型の講義がやりやすかった」という声ももらっている。
- ・教える側として、学生に能動的に学習を進めさせようと、題材や授業テーマなど工夫をして、学生の発言、発表場面など活躍場面を増やすよう努力してきた。当初は、学生側が受け身態勢にすぐなろうとするので苦労したが、徐々に慣れ最終的には楽しいと感じてくれたようであった。（授業後のアンケートより）
- ・ALという言葉は初めて聞きましたが、学生中心の授業は以前から関心があり、取り組んできました。こうした取り組みが大学だけでなく、小・中・高にも広がっていくことを期待しています。やってみて感じることは、こちらの準備した内容よりも、学生が学びたい内容に合わせていく方がうまくいきやすいという事です。しかし、そうするとシラバスとズレてしまうという難しさがあります。また、クラスの雰囲気活性化されるようにするには簡単ではないと常々感じています。
- ・学生が学修成果を実感できるように、さらに工夫改善をしていきたいと思っています。
- ・25年前から取り組み始め、大学授業実践としてすでにいくつか出版しているので、時代が追いついてきたと感じている。学生による授業評価では、他校も含め5点満点で4.5～4.8をキープしている。（参考までにシラバスを添付）
- ・体験や、グループワークでは90分でするのは時間に余裕がなかったが、事前準備と2コマ続けるなどすることで補った。
- ・時代にマッチした教育だと思います。

##### 《反対意見》 5件

- ・大学の授業は講義、演習、実習などあるが、ALばかりで講義になるのか不明である。
- ・方法論のみを語っている記事等を多く見かけます。それよりも、「なぜその方法を授業に取り入れるか」という部分にこそ、もっと力を入れて考えなければならないと思っています。
- ・学生主体・参加の授業は、今まで進めてきたものであって、これからALとして特に進めていこうとするには賛成できない。
- ・ALは非常に手間がかかる。また、コースによって学生の意識が異なることから、常に授業に取り入れるのは難しい。負担を減らしてくれれば（教養科目を免除）今まで通り、続けられる。

- ・反転学習が可能ならば、もっと授業をアクティブにできるのだが、基礎学習してこない学生がいるため難しいかもしれない。学生に丸投げしている授業をALとは言わないので、授業構造が大切だと思う。

### 《要望》 5件

- ・今年度から一部の教室で机・椅子を可動式のものに変えて頂きましたが、出来ればそのような設備を他の部屋にも広げて頂けると助かります。また、小さなホワイトボードなども、可能であれば教務課でお借りできるようなシステムになっていると（20グループ分くらい）、利用してALが実施しやすくなると思います。
- ・教室におけるインターネット環境の充実を希望致します。無線LAN環境の早期整備、設備の充実が必要と考えます。
- ・授業ビデオ観察によるワークショップを行う際に使用するB紙や付箋の支給があるとより効率的である。授業前の宿題的な課題を設定することが次の課題である。
- ・非常勤講師は、ALの手法を学ぶ機会がありません。また、学内でカリキュラムや授業のあり方についての全体像など知る機会もありません。非常勤講師も含めた講習会や説明会があればと思います。
- ・FD等で行って頂けるとありがたいです。

### 《その他》 2件

- ・そもそも「アクティブ・ラーニング」という語を用いずとも、学生たちは熱心に講義を聴いている実態がある。授業は講義者を受講者との相互行為であるため、ALと表記せずとも（意識せず）、ALの要素は自然と毎回の講義の要素として含まれていた。
- ・作業にならないようにする試みは、いずれもほとんど「アクティブ」にはならず、難しさを感じている。

## ○自然科学系

### 《賛成意見》 2件

- ・形式だけでなく、質についても本来は問われると思いますので、適切な推進（カリキュラム、ポリシーやディプロマポリシーも基づく目的・目標との対応づけのある授業構想）を行われることを期待しております。
- ・理科学研究の授業でグループワーク、ディスカッションを行う予定である。

### 《反対意見》 7件

- ・ALの重要性は理解出来ませんが、すべての授業で適用できるものではありません。多人数のマス授業や、基礎知識、基本的スキルを習得する授業ではALは適さないと思います。
- ・グループを生徒に任せるか、先生が指定するかを悩む。生徒に任せただけの場合、グループに慣れない子がでる。
- ・ALすること（方法論や手段）に囚われすぎて、本質を見失うのは本末転倒だと思う。例えば、グループディスカッションは（ある意味で）答えのない問題（道徳など）については、有効であると思うが、足し算の定義を学ぶ上では適切とは思えない。方法論や手段の特性を把握して適宜用いるべきであると考えます。
- ・ALは方法であり、それが目的になってはいけない。そして、その目的は能力育成であるが、どういう能力であり、教科ごとで本当に活用できるのかということを考えなくてはならない。（知識の転移に関する）
- ・教える内容を減らさない限りALの導入は難しい。学生の興味・関心が低かったり能力が低いと効果がない。

- ・学生が自分で（時間がどんなにかかっても）答えにたどりつくことが大切なので、ディスカッションやディベートは必ずしも良くないと思います。友達と相談すると、わかった気になってしまうことが心配です。
- ・授業時間が週1回と限られている限り、ALで出来ることは限られていると感じている。特に専門科目でAL専用科目を導入するとすれば、到達目標を厳しく見極めなければならない。

### 《要望》 6件

- ・ホワイトボードやICT環境などの環境整備
- ・ALの本格的導入においては、授業外学習が欠かせないはず。他大学の事例など、ALがうまく機能するためにやり方について知る機会や議論する機会を設けて頂けると幸いです。
- ・20～25名の学生数であるとAL、またAL要素を取り入れた授業が設計しやすい。移動できる椅子、適当な広さなど教室環境がALを意識した環境になっているとやり易い。
- ・ALを実施するために教室環境も大切です。今の場合、机が多すぎます。
- ・どのような内容であればALで学習効果が高まるのか、という点について基礎を与える資料などあれば参考にしたい。ALの際、学生のインターネットの利用頻度が高まるが、インターネットリテラシーの教育が行き届いていないと感じる。ALの活用とネットリテラシー教育は合わせて行くと効果的だと考える。
- ・ALの授業の進め方等で実際に実施しているところを見学した事がないので、具体的なイメージがつかめない状況です。ALの方法を紹介する資料などは多く見つかるのですが、文章のみでは伝わりづらい部分もあります。推奨するビデオや動画、公開授業などがあれば、今後の導入や授業方法などについての参考になるかと思います。

### 《その他》 9件

- ・学生が初めて学ぶ内容については、まずは教員から学生への知識伝達が必要であるため、講義形式が有効であると考えます。講義を受講した後、学生がその内容をさらに深く学修するためには、学生自身が自発的な勉学態度を身につけることが必要です。その方策にはいろいろなやり方があると思いますが、その中である種の方策を指して「アクティブ・ラーニング」と呼んでいるものと思います。大学における自然科学の教育には従前から講義、演習、実験という3種類の形態で教育が行われてきております。このうちの演習と実験がいわゆるALと呼ばれる教育形態に相当するものと考えています。
- ・現実的に行うためには、受講者が少ない方がよい。（30名以下）
- ・一般論ですが・・・AL授業を成功させる為には、担当教員の事前の準備がきわめて重要になります。かなりの負担の増が生じます。本学の場合、現状の担当コマ数のままで、ALを60%にまで増やす目標は現実的ではないと思います。担当科目数を減らして、各授業を充実させるとか、見せかけ上ALのように申告できる授業スタイルにして対応するとか・・・工夫は必要ですね。
- ・訪問科学実験のシステム改革、アクティブ・ラーニング授業としての単位化。
- ・ALには長所と短所がある。単なる流行で終わらないためには、学生の学習（カリキュラム）の見直しが必要となる。つまり予習・復習をすることや、学修内容や一貫性である。
- ・私が学生の頃は、ひたすら板書を行う先生もおられたが、現在の本学の数学スタッフはおそらく全員、適切なタイミングでの問題演習を行っていると思う。数学では、フィールドワークや野外授業やディスカッションは意味をなさないで、適切なタイミングで各学生に考える時間を与えることが有効なALだと思う。

- ・先日 FD で語られた事の一つは、「AL という言葉で教育界に期待されていることは、学んだ知識を知恵に変えられる／使いこなせる人材を輩出せよ」ということでした。中期目標の”6割”の為には、AL をできるだけゆりく捉え、担当者が出来る範囲で「AL 化した」講義を認めていかねばならないでしょう。一方で、理想を言えば、多くの学生が「大学での学びは、確かに、生活に、人生に使える」と実感して卒業出来ればと思います。まじめに捉えるなら、どれだけ学生がアクティブに学べたか？の透明化が何らかの形で出来ればと思う次第です。
- ・90 分の講義となると、AL を取り込むことは必要であり、将来教員を目指す学生にとっては有効な方法であるが、これまでにしていたことと何ら変わりがない気がします。
- ・グループディスカッションをやらせてみたのですが、話し合いをすることがなかなか難しいようでした。

## ○人文社会科学系

### 《賛成意見》 10 件

- ・やるのは賛成だが、教える方法や内容をじっくり検討する余裕（時間）がほしい。
- ・AL を学生に促すというのは、ひとつ矛盾だと常々思っていますが、AL の理念自体には同感です。「席に座っていれば教員がよろしく教えてくれる」と思っている学生がほぼ全員であることは非常に残念です。AL は全学的に取り組むべき事項だと思います。しかし、本学の学生は絶望的に無知なので AL を実践するには程遠いというのが実態でしょう。ディスカッションをやらせても悲しいくらい幼稚なことしか言ってくれない。道遠しです。
- ・現在、非常勤先のドイツ語授業（1 クラス 25 名まで）では、AL をやっています。しかし愛教大では 1 クラスの人数が 40 名を超えるので、AL がやり難いです。今後工夫してやってみます。
- ・AL は良いと思いますが、有益な議論をするために知識を増やす努力（講義・実習等）は必須だと思います。
- ・社会科で、博物館見学などを取り入れて、そこから課題づくり（調べ学習・・・図書館・CP 使用）グループ討論などをさせてみたいです。現場でも近くの郷土資料館などの見学が行われるようになってきているので、大学時代に一度は経験させてみたいです。小学校勤務では社会科専門でなくても、このような学習をすることになりますので。
- ・なるべく学生主体の授業にしたいと取り組んでいるが、学生の英語力にばらつきがあり、扱うトピックによっては日本語になってしまうものもある。しかしながら、まずは自分がどう考えるかが大切で、それがないと他者に発信していく事が出来ない。学生同士が積極的に意見を交換していく場として、これからも AL を取り入れていきたい。（教室の机が移動させにくく、グループワークがやりにくい場合も多い。残念ですが、教室が選べないので。また、人数が少ない方やりやすい。）
- ・毎時間 2~4 人でのグループ活動を行っていますが、必ず個々の活動（交流したことを取り入れて、レポートにまとめさせるなど）に持っていき、個々の学びにつなげています。
- ・大学の授業こそ AL が必要と考えています。AL を実現しようとする、一講座に学生が 50 人を超えることは考える必要があると思います。
- ・5 週間ごとにグループ分けを実施したことが、前年度（2015 年）より効果的であった。できるだけ多くのクラスメイトとコミュニケーションが取れることが、受講生にとって新鮮であったようである。
- ・学生参加型という点については、大変良いかと思いますが、学生のレベル・性質等により、AL 型授業が成立しない場合もあると思います。



## 《反対意見》 9件

- ・10～15名程度の双方向的な語学の授業や、古典テキストを解説する演習などは、大学ではごく一般的（あるいはオールドスタイル）な授業形態だと思われませんが、冒頭に示された定義に握ると、古典的なALになる気がします。小～高の教育における事例をメインに考えているせいか、あまりしっくりきません。ALが十分明確に把握出来ていないのではと我ながら思うところです。（これらの授業を問3ではカウントしていますが、除くのであれば結果として残るのは3科目程となります）
- ・40～60人のクラスで学生による発表を採り入れても、質問や意見が出ることはほとんどない。
- ・7/20のFD講演会でも言われていたが、あらゆる授業において、学生が能動的に学べばALなのではないか？ALを増やすというこのような取り組みは、グループワークやプレゼン自体を目的にしがちになり、気を付けないと教育の質が下がると思う。
- ・ALも結構ですが、その古典的な形態である演習（少人数）も大事です。最近、授業のスリム化の一環ということで演習のコマ数が特に教員の了解も得ないまま削られるという「事件」が起きましたが（教員から執行部に抗議することによって取り消しとなった）、そのような本末転倒のやり方はやめてほしいと思います。
- ・学生主体の授業を実りあるものにするには、教員のバックアップが必要かつ重要である。そのために費やすエネルギーと時間を惜しんでいては、うまくいかないと思う。
- ・ALを導入すると、授業形態が演習的になることが多く、「講義」に区分される授業でどの程度まで妥当であるのか。また、できるだけALを用いた方がよいとするならば「講義」と「演習」の区分にどのような意味があるのかよくわかりません。
- ・ALを増やせば様々な効果は上がるが、専門的な知識のインプットは相対的に減る気がする。バランスが難しいと感じる。全てがALで効果的なのか。
- ・専門ではある程度こちらから知識伝達も必要なので、その（ALとの）バランスが難しい。また人の話しをしっかり聴くことが出来て、はじめて発言をできるのではないか。
- ・ALの定義そのものが、理解しづらい点が多い。グループディスカッションや討論型授業などの要素があればALなのか？「能動的な」学習への参加という意味ならば、従来の「演習」型授業でも、その要素は十分含まれるはず。今更ALというのも大げさな感は否めない。「講義型式」ではなく「能動的な学修へ」という方向性は、もう何年も前から言われていたことだし、実施されてきたことではないのか。

## 《要望》 5件

- ・動画講義について、労力的・費用的にも負担にならないようにしてほしい。学外に転出することを考えている教員もあろうから、個人的にYou Tube等を利用する道を必ず残しておいてほしい。
- ・もし、大学で本格的にALを導入するのであれば、事前に教員向けの研修を行ってほしいです。また、読んでおくべき文献がありましたら教えてほしいです。
- ・大学附属図書館内で、ALで授業のできるスペースを作って頂きたいです。説明は教室で、その後図書館へ移動して、開講する場合があります。
- ・グループワーク等を行う際、学生の人数と講義室の広さは同じくらいであると進行しやすい。
- ・具体的な取り組みについて知り、理解を深める場（講習会など）があると促進につながると思う。

## 《その他》 2件

- ・このような授業展開を進めたいが、1クラスの人数が多いので難しい面がある。
- ・文科省による定義を読むと、当該科目に関する知識のみならず、「倫理的・社会的能力・・・経験を含めた汎用的能力の育成を図る。」とあり、具体的な実施方法については戸惑いがあるものの、教授者に対して科目に対するより深い知識を要求している点では、案外オーソドックスな教育法であるように感じました。

## ○創造科学系

### 《賛成意見》 3件

- ・義務教育下においては、随分前からこのような活動を中心とした学習（授業）方法がとられてきている。今、在学中の学生たちは、その中で育ってきたはず。違和感なく取り入れることが出来ると思うし、教育現場では必要なことなので、ALを取り入れた内容がたくさん実施されると良いと思う。
- ・ALを取り入れることによって、学生相互の意識が高まり教師とのコミュニケーションがとれて良いので、全授業に取り入れている。
- ・教科教育法で（演習方法）グループ学習を体験しましたが、履修学生数が多すぎて（60名）各々学生に発言・発表のチャンスを持たせることが大変難しかった。クラス人数はある程度少なめで学生に全員の前で発表できるチャンスを与えたい。

### 《反対意見》 3件

- ・専門的内容（精神医療）知識を教えるにあたり、多量の知識を教える時間が必要であり、ALは行いにくい。
- ・ALという言葉ばかりが、世の中で出回り、実態や内容、科目の特性によっては特別含む必要のない科目までも無理にALが求められている気がします。
- ・授業は目的追求の営み。そのための最適な方法をえらぶのみと思っています。あわせて本学の目的に対しても最適を選ぶのみ。流れにのってALやれば良いというものでもないと思えます。

### 《要望》 1件

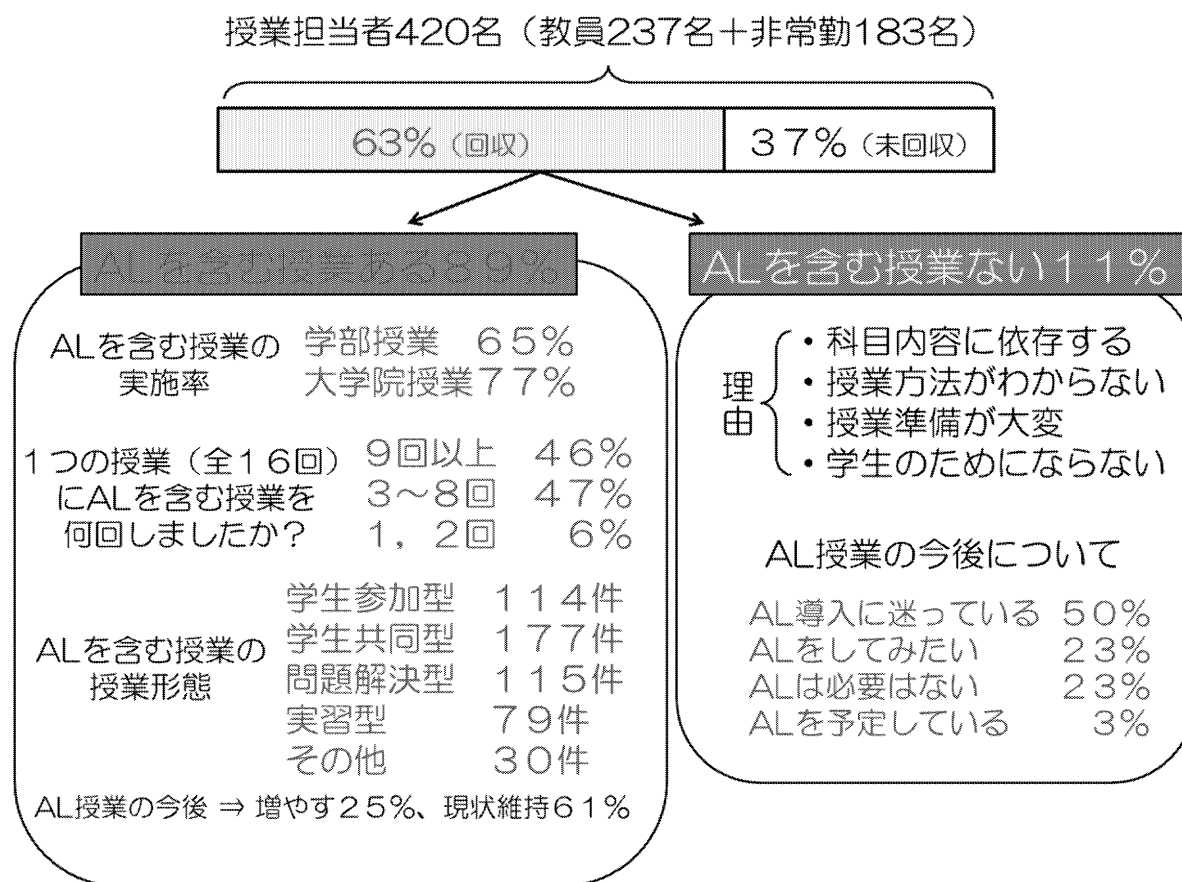
- ・学生の受講状況によっては、学生数が多くALがスムーズでない場合もあります。（時間や場所・教材料の問題など）、講座数を増やして、授業数を減らしていただけたら、もう少しALが効果的になるのではないかと思います。また、多人数でも可能なALの方法をこちらも学びたいと思います。

## 《その他》 3件

- ・ALは否定はしないが、既存の学びの型の中での改善も大切であると思われる。
- ・体育に関する授業は、ほとんどが以前よりアクティブ・ラーニングだったと思います。
- ・運動・スポーツは主体性があるもので、一応ALの汎用的能力に当てはまる力を養えると思いましたが、9/10という回答をしております。もし、検討違いであれば訂正いたしますので、ご連絡下さい。

#### 4. アンケートの分析

以下のように、アンケートの集計結果を簡単にまとめてみた。



#### アンケートを提出した教員の主なアンケート結果（学系別）

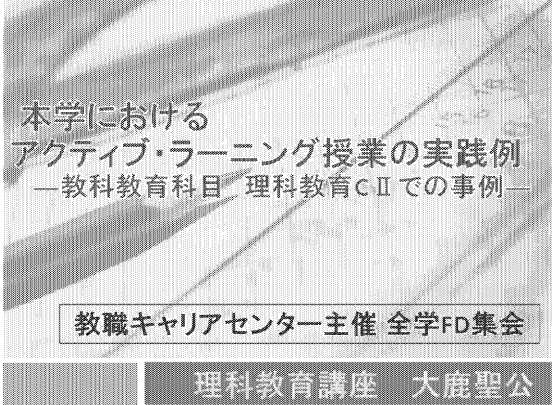
学系	AL実施 教員率	AL導入実施率	
		学部授業	大学院授業
教育科学系	95%	71%	85%
自然科学系	82%	57%	63%
人文社会学系	88%	63%	76%
創造科学系	91%	71%	74%

## 《アンケート結果の分析》

- ・アンケートを提出した教員の自己申告とはいえ、約9割の教員がAL授業を実施している。しかも、学系の区別なく8割～9割で実施されている。これはアンケートを提出している教員が、ALを実施しているから大きい割合になるのか？アンケート未提出者のAL実施状況を知る必要があるかも。
- ・AL授業の実施率が学部6割、大学院7割なので、この時点で中期計画の目標が達成されてしまった。
- ・自然科学系でのAL導入授業の実施率が、他の学系に比べて低い。これは、学問の性質上、座学中心の授業形態になるからであろうか。
- ・ALを導入しない教員の中にも、AL授業をやってみたい、迷っているという教員が半数以上いる。AL授業を支援するためのハード面とソフト面をプロジェクトで検討する必要がある。
- ・AL要素とは具体的にどのようなものを指すのか（授業形態だけでよいのかの検討も含めて）定義を明確化（明文化）したうえでアンケートを実施したほうがよいと感じた。
- ・何をもって「主体的・協働的な学び」を実践できる教員の養成」が達成に向かっていると評価するのか、学生の意識や取組態度の変容なりに基づき評価したほうがよいと思われる。
- ・教員側がALを実施していると認識していても、学生側の認識が同じであるとは限らない。今後は、教員と学生の双方向の授業評価が必要であると考えます。

## ○第二部 本学におけるアクティブ・ラーニング授業の実践例 1

### 当日の配付資料



本学における  
アクティブ・ラーニング授業の実践例  
—教科教育科目 理科教育CⅡでの事例—

教職キャリアセンター主催 全学FD集会

理科教育講座 大鹿聖公

1

### 海外での経験から学んだこと

2

そもそものきっかけ

アメリカの科学教育カリキュラムの研究

- 探究的な科学教育プログラム
- さまざまな教授方略の導入

アメリカでの学校での理科授業

- 授業方針の違い
- プレゼンテーション活動(自己主張・表現)
- 体験活動の導入(ディベート・ロールプレイング)

2

### 自己主張・自己表現力を高めたい

3

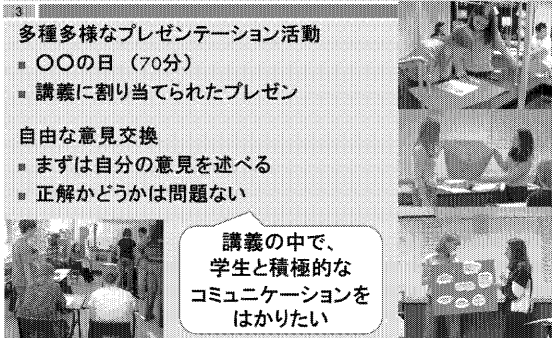
多種多様なプレゼンテーション活動

- ○○の日 (70分)
- 講義に割り当てられたプレゼン

自由な意見交換

- まずは自分の意見を述べる
- 正解かどうかは問題ない

講義の中で、  
学生と積極的な  
コミュニケーションを  
はかりたい



3

### 協働学習を講義に取り入れる

4

BSCS (Biological Science Curriculum Study)

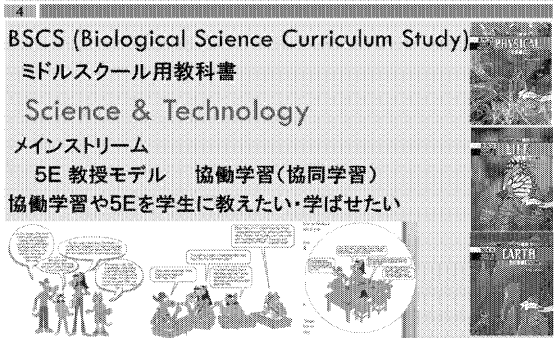
ミドルスクール用教科書

Science & Technology

メインストリーム

5E 教授モデル 協働学習(協同学習)

協働学習や5Eを学生に教えたい・学ばせたい



4

### 教師は体験したもののみを教授する

5

- ◆ 百聞は一見にしかず
- ◆ 百見は一体験にしかず(造語)
- ◆ 教員としての資質・能力を高めるには  
さまざまな体験をさせることが一番効果的

5

### ということで

6

講義の範疇の中で可能な限りの提供を...

自分の講義(教科教育科目)で、やるしかない

**理科教育CⅡで展開・実践しよう!**

6

## 理科教育C II

理科教育  
選修・専攻対象

### 授業目標

(4・技能/表現) 講義の活動にグループによる協働学習を導入し、獲得した知識を議論を通して向上させるとともに、プレゼンテーションや活動を通して、実践的な理解をはかります。

### 授業計画・方法

5) 協働学習活動を定期的に行いながら、協働学習のスタイルを学ぶと同時に、プレゼンテーション技能や講義内容について考察する。

7

## 講義のねらい・ポイント

- 理科の学生に講義の中で、可能な限りの教材や実物、活動などを体験させ、学生自身の記憶、経験として獲得させること
- 講義での活動や体験、レポートなどの作業を協働学習のための素材として活用し、学生同士の議論の基盤とさせること
- 1分間のプレゼンを経験させることで、コミュニケーション能力、自己アピールなどの社会的なスキルの向上を目指す

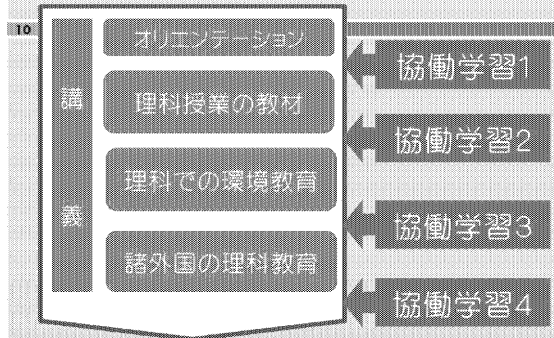
8

## 講義概要

講義内容	
①	オリエンテーション・理科と科学
②	協働学習活動1(理科授業の課題)
③	理科教材1 理科授業における教材とその役割
④	理科教材2 実験観察技能・飼育栽培・自然体験
⑤	理科教材3 地域素材・身近な素材を活かした教材
⑥	理科教材4 科学の方法とプロセス・スキル
⑦	協働学習活動2(理科授業における教材)
⑧	環境教育1 理科教育における環境教育・ESD
⑨	環境教育2 パッケージプログラム(Project WILD&WET)
⑩	環境教育3 意思決定活動(エネルギーMIXを考える)
⑪	協働学習活動3(環境問題とその解決策)
⑫	PISAとTIMSSにみる世界の理科教育
⑬	諸外国からみた理科教育1(アメリカ大陸)
⑭	諸外国からみた理科教育2(欧州・アジア)
⑮	協働学習活動4(諸外国の理科教育から学ぶ)

9

## 講義における協働学習・プレゼン実習



10

## 協働学習によるプレゼンテーション活動

- BSCS Science & Technologyの方法を応用
- 4名1グループ(役割分担)
- 時間制限(75分間)
- 1分間プレゼンテーション
- 準備資料は、各自の記入用紙

教授方法の体験・習得 時間管理  
個人と集団の責任能力・プレゼン能力  
講義内容の確認・補填

11

## 基本的な活動方法

活動時間 75分

- |   |    |
|---|----|
| ① 役割分担<br>(コミュニケーター・マネージャー・トラッカー・チームメンバー) | 20 |
| ② 個人で質問紙に記入                               |    |
| ③ 結果についてグループで議論                           |    |
| ④ プレゼンテーションテーマの提示                         | 5  |
| ⑤ プレゼンに必要な情報の収集                           |    |
| ⑥ プレゼンテーション資料の作成                          | 30 |
| ⑦ プレゼンテーションの実施(1分)                        |    |
| ⑧ プレゼンテーションの評価                            | 20 |

12

### 講義での協働学習活動の実際①

13

グループでの役割を決める

学生に責任を持たせる

**マネージャー**

- 材料を持ってきて班員に分配し、使い終わったら戻す。
- 先生に材料の不足、欠陥を報告する。
- 材料を取りに行くために班を離れることができる。

**コミュニケーター**

- 他の班とコミュニケーションを維持する。
- 明らかに班員で解決できない問題が生じたら先生に助けを求める。
- 他の班、先生と話すために班を離れることができる。

**トラッカー**

- 活動手順どおりに進め、締切期間や制限時間を管理する。
- 次に何をすべきか明確に班員に示す。
- 活動の目的、方向性をはっきりさせ、班員の意思を統一する。

**チームメンバー**

- 片付けを主体的に進める
- 班の考えと活動をまとめる（リーダーのような働き）。
- 発表の時に発表者になる。
- 班員が自分の役割を忘れずに行うよう気づかせる（役割の把握が重要）。

### 講義での協働学習活動の実際②

14

質問用紙に各自で回答する

各自の考えをまとめる

**理科・学校**

- 理科が嫌われる理由は？
- 理科では実験観察を重視する？
- 高校理科は必修・選択？
- 学校で飼育・栽培したい生物は？

**教材**

- 小学校理科・中学校理科で実験観察が行いにくい単元は？

**諸外国**

- 理想とする日本の理科教育とは？
- 参考にすべき諸外国の取り組み？

**環境・ESD**

- エネルギー問題 気候変動
- 持続可能な森林利用 水利用

個人で記入後、グループで結果共有

### 講義での協働学習活動の実際③

15

データを収集・プレゼン作成

グループで議論・協働

**データ収集**

- 個人の回答を集計する
- 不足な情報についてはネット検索
- 追加で要講者にインタビュー

**プレゼン作成**

- 収集したデータを元にプレゼンを作成
- A3用紙 2, 3枚 手書き
- 1分間のプレゼンテーション

プレゼンの内容・方法はグループの自由  
短い時間で自由な発想

### 講義での協働学習活動の実際④

16

プレゼン発表・評価

発表

- チームメンバーによる発表
- 1分間 時間厳守！！
- いかに伝えるか まとめるか

発表 ↓ 評価 ↓ 振り返り ↓ 次回

効率的にポイントを発表

時間感覚を学ぶ  
表現手法を学ぶ  
次回に活かす

### 協働学習活動の発展

17

マンネリを防ぐために

授業における多様な状況に応用

**ワールド・カフェ**

- テーブル(メンバー)を替えながら議論を進める

**PlayDecide**

- 議論になる話題についての意思決定ゲーム

**テーマ設定**

- 講義の内容に関するレポートの活用

4人別々のレポート → 各自の責任  
多くの人間の意見・アイデア  
他人のレポート レポート評価

### 協働学習の評価

18

学生の自己評価結果

協働学習活動	1	2	3	4
グループでの役割	3.9	4.0	4.0	4.2
グループでの積極的な発言	3.9	4.1	4.2	4.4
メンバーの意見の受け入れ	4.0	4.2	4.2	4.6
プレゼン資料の作成	3.6	3.6	4.0	4.0
効果的なプレゼン実施	3.4	3.9	3.8	4.0
他グループのプレゼン観察	4.2	4.2	4.3	4.5

繰り返し実践による効果の上昇



## 協働学習の評価

### 学生の自己評価結果

19

協働学習を通じた 講義の理解	諸外国	教材	環境
講義内容の深化	4.3	4.1	4.2
講義内容の整理	3.9	4.0	4.0
講義内容への興味関心	4.4	4.5	4.4
講義内容に関する議論	4.3	4.4	4.3
講義への参加意欲・態度	4.4	4.3	4.4
講義自体への興味関心	4.3	4.3	4.4

講義自体への付加的効果・影響

19

## 協働学習の評価

### 学生の協働学習に関する感想

20

	1	2	3	4
全員参加・班員の協力	10	1		8
役割の責任・活動	7		3	
プレゼン資料・方法検討	7	10	13	8
時間管理	11		5	1
意見集約・意見交流	4	14	7	5
話し合いの深化	5	11	6	5
講義内容の整理・深化	3	7	4	5
各種能力の育成	3	3		5

20

## 協働学習による効果・課題

21

### 協働学習・プレゼンによる効果

- 学生の主体的な講義参加
- 繰り返し効果
- 各種能力の向上  
資料分析・資料作成・プレゼン
- 講義内容の深化・議論・整理

### 講義内での限界と課題

- 具体的な実験観察活動が困難
- パターン化に限界
- 講義内容との連携・集約

21

## アクティブ・ラーニングについての私見

22

講義や専門によって、スタイルは異なるのは当たり前  
→ それぞれのスタイルを見つける

学生をアクティブにするために、それなりのインプットが必要  
→ 講義全てをアクティブにする必要はない

教員が苦勞するのではなく、楽できるための仕掛けを入れる  
→ 学生がアクティブであれば、教員の仕事は特にな  
教員はあくまで学生の行動を支援する立場に徹する

学生が主体的に動くためには  
→ 講義での活動にモチベーションをもたせる  
スキルがあがる ○○に役立つ……

22



## ○第三部 本学におけるアクティブ・ラーニング授業の実践例2

### 当日の配付資料

#### 「学習活動の在り方」p1左下[1. 2]

[学校教育法]

課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力を育み、主体的に学習に取り組む態度を養う

[初等中等教育における教育課程の基準等の在り方]

①判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べることに課題がある

↓  
課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習(アクティブ・ラーニング)や、そのための指導の方法等を充実させていく必要がある

1

#### 「アクティブ・ラーニング」p12左「ALの整理」

「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」  
教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、  
学修者の能動的な学修への参加を取り入れた  
教授・学習法の総称

発見学習  
問題解決学習  
体験学習  
調査学習  
グループ・ディスカッション  
ディベート  
グループ・ワーク

2

#### 「OECDにおけるキー・コンピテンシーについて」 p1右下より[1. 3. 2]

- ①社会的・文化的・技術的ツールを相互作用的に活用する能力
- ②多様な集団における人間関係形成能力
- ③自立的に行動する能力

3

#### 教育課程の編成に関する基礎的研究報告書P2左[1. 3. 4]

- ①有意義な文脈で学ぶ
- ②自分の考えを持っている
- ③対話で考えを深められる
- ④考えるためには材料が必要
- ⑤すべ(方略)は必要に応じて使うことができる
- ⑥学び方は繰り返し振り返って自覚できる
- ⑦学び合いの文化があるとより学びやすくなる

- ↓
- ①教科等の概念の深い理解や本質の把握が「知識・技能の活用」に繋がる
  - ②知識・技能を学習活動を通じて学ぶことで資質・能力を身に付けるという構造で教育目標を設定

#### 音楽科が寄与できる子供の成長 p2左下[1. 4]

計画的・意図的な対立から合意に向かう活動  
納得・妥協を得るための説得や話し合いの活動

↓

- ①知識や情報を活用する能力  
(他人の意見や選択肢の理解、自らの意見の形成)
- ②他人と円滑に人間関係を構築する能力
- ③協調する能力
- ④利害の対立を御し、解決する能力

5

#### [P2右中]

①「自己理解の力」と「他者理解の力」が、  
コミュニケーションを確立する力へと繋がる

②「計画立案力(練習の見通しや段取りをつける力)」と「課題解決力(必要な知識や技術、それを身に付ける力)が、自己実現の力へと繋がる

↑

子供へ丸投げする考え方や、教えないことこそが最善の教育等の主張には与せず、発達段階に応じた適切な課題を子供が発見できるように計画的に備えたり、子供の多様な気づきや発見にも対応できるように計画的臨機応変を想定しておく授業を模索していきたい

6

### 音楽科で身に付ける力 p2右[1. 4]

- ①テクニカル・スキル(音楽に関する技術や知識)
- ②コグニティブ・スキル(音楽的状况の認識力)
- ③イノベーション(問題解決に向けた刷新力)
- ④インター・パーソナル・スキル(意思疎通力)
- ⑤コミュニケーション&コラボレーション

7

### 内発的思考を活性化する学習ステップ p4左[3. 2]

- ①他者や自身の演奏を聴いて音楽の諸要素に気付き、感じ取り、意識する
- ②他者や自身の演奏を聴いたり、練習前と練習後の演奏を聴き比べたりして、音楽の諸要素の良さや働きを自覚し、それを生かしたり際立たせたりする
- ③音楽の諸要素同士の係わりや組み合わせによって生まれる効果や働き、要素の組み合わせで形づくられる音楽の仕組みを考える
- ④音楽の諸要素同士の係わりや組み合わせによって生まれる効果や働き、要素の組み合わせで形づくられる音楽の仕組みを考える
- ⑤気付き感じたことを自らの演奏へ結び付け、言語・非言語活動を活用して共通理解へ高めた上で演奏へフィードバックする

8

### 「内発的思考を活性化する活動」 p2[3. 2]

- ①聴く行為が「能動的に音楽と向き合い、自らの表現欲求と照合して聴く」という創造的な活動であることを体感し、理解させる
- ②音楽活動の基盤は「気付く・感じ取る・比べる・考える・まとめる・伝える」ことであり、音楽構成要素を触媒として演奏と鑑賞が相互作用的に関わり合う活動
- ③音や音楽の正体や仕組みを知っていてそれを使いこなす技能を持っていないければ、より高いレベルの音楽活動へ繋がらない
- ④演奏者は自らの思いや意図を具現化するために演奏上の工夫を試行錯誤することを楽しみ、鑑賞者はその工夫や試行錯誤を読み解き演奏者の思いや意図を予想し推察しながら聴くことを楽しむ
- ⑤より高い音楽レベルでは、発信者である演奏者を育てることと受信者である鑑賞者を育てることは同義であり、不可分

9

音楽科における思考①内的思考からのアプローチ  
探求－選択－判断のプロセスに働く内的思考が音楽的思考

音楽科における思考②「つくる」活動からのアプローチ  
音楽的思考＝分析的思考・批判的思考・創造的思考

音楽科における思考③認知論からのアプローチ  
知識獲得の技能⇒処理の技能⇒転移と応用の技能

音楽科における思考④  
教科としての学力論からのアプローチ  
「思考・判断・表現」から音楽活動における思考を捉えたもの

10

### 今回取り上げた音楽科の思考

#### 「つくる」活動からのアプローチ

音楽的思考＝分析的思考+批判的思考+創造的思考

音楽的思考を基盤として、生活の中で育ててきたイメージやアイデアを音や音楽の構成要素を使って音楽表現に結びつけるという学習活動

「音楽的思考(musical thinking) JMMCP(1965-1970)  
～子どもが主体となる能動的な音楽学習をめざしたもの～

ペインター&アストンの「創造的音楽づくり」にも見られる

11

### 一般の学生を対象にした授業の報告 M1A ①

授業の前半は指導要領の共通教材を扱う  
授業の後半が「創る」活動(グループによるA.L.)

- ①手拍子を共有する活動(ビートの同期→予期)
- ②手拍子を回していく活動(テンポの保存)
- ③回していく手拍子の強弱を変化する活動
- ④回していく手拍子のテンポを変化する活動
- ⑤タッカのリズムを回していく活動
- ⑥タタタのリズムを回していく活動
- ⑦リズム創作(期末テスト) \*ビデオ

12

一般の学生を対象にした授業の報告 M1A ②

リズム創作(期末テスト)の手順

①一人一人が2小節のリズム・パターンを考える

↓  
②グループで繋ぎ合わせる

↓  
③作品として創りこんでいく

叩く場所を変えて音色を変化させる  
強弱やテンポを変化させる  
リズム・パターンの組み合わせを工夫する  
打楽器以外の音を工夫する(ボディパーカッションなど)

13

音楽科1年生(前期)の授業の報告① M1A

- ①「できる」と「できない」に気付き、その事実を受け入れられる人になろう
- ②「できている」と「できていない」に気付き、自分自身を現状分析できる人になろう
- ③「知っている」と「できる」の違いを理解し、それを認められる人になろう
- ④「やればいい」や「できた」ではなく、他の人へ見せても恥ずかしくないもの、より良いもの、人に感動を与えられるものを創り上げる「こだわりの心」を持とう
- ⑤必要な時に必要なことを、思い切って人前で演じることができる人になろう
- ⑥音楽について頼りにされ、必要な時に必要とされる人になろう

14

音楽科の学生を対象にした授業 M1A

授業の前半は指導要領の共通教材を扱う  
授業の後半が「創る」活動(グループによるA.L.)

- ①M1Aと同じ手拍子の活動
- ②リズムパターンを素材にした創作  
「ケチャ」のリズムを素材にした創作 \*ビデオ  
「6リズムズ」を素材にした創作
- ③リズムと和太鼓を素材にした「創作和太鼓」
- ④創作歌曲(期末試験)

15

音楽科4年生(前期)の授業② M2C4

浜松市楽器博物館を取材して教材を制作せよ!

- ①15分以内のプロモーションビデオ
- ②A紙またはB紙にまとめたポスター(壁面教材)
- ③パワーポイントを用いたプレゼン

[手順]

- ①チーム全員で浜松市楽器博物館について調べる
- ②教材制作の対象を決める(小学生/中学生)
- ③何を紹介したいのか、テーマや楽器群を決定する
- ④リサーチ終了後、チーム全員で現地取材を決行!
- ⑤取材結果の整理と報告のスタイルを決めて、グループ内で役割分担を決めて制作開始!

16

教材成立条件①:興味を抱かせるAIDMA

Attention: 気づかせる 注目させる

↓  
Interest: 興味をもたせる

↓  
Desire: やってみたいと思わせる

↓  
Memory: 記憶にとどめさせる

↓  
Action: 活動や行動に取り組ませる

17

教材成立条件②: 4つのPのバランスをとる

Place: 対象や相手など使用する場を想像する

Promotion: 興味や関心を持たせる為の働き掛け

Price: どの程度の価値をもたせるのか

Product: 教材の基本コンセプト

何を学ばせるために、どのように作るか

18

## ○第四部 本学が目指すアクティブ・ラーニングについて

### 当日の配付資料

2017/3/29

全学FD資料「本学の目指すAL（案）」

野 田 敦 敬

#### <文科省AL定義（2012）>

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり，学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって，認知的，倫理的，社会的能力，教養，知識，経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習，問題解決学習，体験学習，調査学習等が含まれるが，教室内でのグループ・ディスカッション，ディベート，グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

本学の教育課程は，多様な授業科目で構成されているため，一律に目指すアクティブ・ラーニングを示すこと難しい。以下に，中教審が示したALの視点に教員養成大学ならではの視点を含め，4つの視点から目指すALを考えた。

#### <主体的な学びの視点>

授業内容等から学修者自らが課題を発見し，その課題の解決に向けて，問題解決学習，体験学習，調査学習等を行うことで，認知的，倫理的，社会的能力，教養，知識，経験を含めた汎用的能力が育成されている。

#### <対話的な学びの視点>

学修課題及び修得した教養，収集したデータ，体験等について，グループ・ディスカッション，ディベート，グループ・ワーク等を行うことで，より個人の学びが深まっている。

#### <深い学びの視点>

単に断片的な知識や技能等を習得するのではなく，主体的及び対話的な学びの過程で，学修者の思考が活性化されることで，知識や技能等の関連が図られ，新たな概念化することができている。

#### <教員養成としての視点>

学修者がALの価値を実感することで，教員及び教育支援専門職に就いたときに，自らが主体的で対話的な深い学びを実践できるようになっている。

各授業では，上記の視点のうち，一つを重点的に取り上げてもよいし，いくつかの視点を取り上げてもよい。今後は，どの視点に重点をおき，目指すALを展開できたかをFD集会や公開授業等の機会に紹介し合うことで，授業の質の向上に努めていきたい。